

# 徳威地区遺跡

— 国道424号線道路改築事業に伴う発掘調査報告書 —

2003年8月

財団法人 和歌山県文化財センター



調査地 遠景（南から）



VI区 微高地縁辺（北から）

## 序 文

和歌山県は広く外海に開けるとともに、紀ノ川、有田川など、河川流域ごとの特色ある文化を育んできました。南部地域も南部川の両岸の丘陵一面に梅林が広がる独特の景観を呈しており、「南高梅」で知られる梅の一大産地あります。また、千里ヶ浜の沖合いに鹿島が浮かぶ風光明媚な土地として有名です。

財団法人和歌山県文化財センターでは、平成9年度から、近畿自動車道の南部インターチェンジ建設に関連する工事に先立って、南部平野における発掘調査を実施してまいりました。調査を経て、縄文時代中期に溯る集落を確認した徳蔵地区遺跡や、複郭構造を持つ高田土居城跡などの重要遺跡を確認することができました。

このうち、国道424号の改築工事に伴う調査を実施した範囲について、出土遺物の整理事業を行い、その成果を発掘調査報告書として刊行するに至りました。発掘調査および出土遺物の整理、また本書の作成にあたっては、和歌山県日高振興局を始めとする多数の方々のご指導・ご協力をいただき厚く御礼申し上げます。

この調査成果が広く活かされ、地域の歴史遺産として受け継がれてゆくことを願ってやみません。

平成15年8月

財団法人 和歌山県文化財センター

理事長 木村 良樹

## 例　　言

1. 本書は、和歌山県日高郡南部川村大字徳蔵に所在する徳蔵地区遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、国道424号道路改築工事に伴うもので、発掘調査を平成10・13・14年度に、遺物整理を平成15年度に実施した。
3. 発掘調査及び遺物整理業務は、和歌山県の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに、財団法人和歌山県文化財センターが実施した。
4. 事務及び調査組織は下記のとおりである。

専務理事（事務局長兼務） 中谷博昭（平成10年度）、岩橋驥（平成13～15年度）

事務局次長 菅原正明（平成10年度）、畠中照雄（平成13年度）

松田正昭（平成13～15年度）、篠原隆（平成14年度）

管理課長 西本悦子

副主査 松尾克人

埋蔵文化財課長 松田正昭（平成10年度） 松下彰（平成13年度） 渋谷高秀（平成14・15年度）

主任 渋谷高秀（平成10年度調査担当）

副主査 黒石哲夫（平成13年度調査担当）

技師 丹野 拓（平成14年度調査・平成15年度整理担当）

専門調査員 立岡和人、藤村瑞穂　：調査補佐員 山野晃司

5. 発掘調査・遺物整理に際し、和歌山県日高振興局道路課、和歌山県教育委員会文化遺産課をはじめとする方々の助言・協力を得た。感謝の意を表したい。
6. 本文は渋谷・黒石・丹野が執筆した。執筆分担は本文目次に記した。
7. 遺構写真は各調査担当者、遺物写真は丹野が撮影した。但し木製品の写真は渋谷が撮影した。
8. 木製品の保存処理は4点を株式会社京都科学に委託し、その他を当センターが行っている。
9. 本書は丹野が編集した。
10. 調査及び整理作業で作成した実測図・写真・台帳等の記録資料は財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が各自保管している。

## 凡　　例

1. 発掘調査で使用した調査コードは下記の通り。

平成10年度調査（国道424号線道路改築に伴う第1次調査・I区）…98-32・47

平成13年度調査（国道424号線道路改築に伴う第2次調査・II～IV区）…01-32・47

平成14年度調査（国道424号線道路改築に伴う第3次調査・V・VI区）…02-32・47

2. 調査の基準線は平面直角座標系（第VI系）を、標高は東京湾標準潮位（T.P.値）を用いた。
3. 土層の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』を使用した。

# 目 次

卷頭写真	1 調査地 遠景	
	2 VI区 微高地縁辺	
序文		
例言		
凡例		
第1章 はじめに	.....	1
第1節 調査に至る経緯と経過	.....	(黒石哲夫) 1
第2節 位置と環境	.....	(丹野 拓) 5
(1) 位置	.....	5
(2) 地理的環境	.....	5
(3) 歴史的環境	.....	6
第3節 調査の方法	.....	(丹野) 8
(1) 調査の方法	.....	8
(2) 整理の方法	.....	11
第2章 調査の成果	.....	12
第1節 平成10年度の調査 (I区)	.....	(渋谷高秀) 12
(1) 層序	.....	12
(2) 遺構と遺物	.....	12
(3) 小結	.....	19
第2節 平成13年度の調査 (II～IV区)	.....	(黒石) 20
(1) 層序	.....	20
(2) 遺構	.....	20
(3) 遺物	.....	22
第3節 平成14年度の調査 (V・VI区)	.....	(丹野) 28
(1) 層序	.....	28
(2) 遺構	.....	31
(3) 遺物	.....	35
第3章 まとめ	.....	(黒石) 36
抄録		

## 写真図版目次

- P L 1 1 遺跡遠景①  
2 遺跡遠景②
- P L 2 1 遺跡遠景③  
2 I 区 全景
- P L 3 1 I 区 溝 1 全景  
2 I 区 溝 1  
3 I 区 溝 1 土層断面
- P L 4 1 I 区 溝 1 木製品出土状況  
2 I 区 溝 1 同近景  
3 I 区 溝 1・2・5
- P L 5 1 II 区 4 層上面 検出遺構  
2 II 区 5 層上面 検出遺構  
3 II 区 4 層上面 人の歩行跡
- P L 6 1 III 区 4 層上面 検出遺構  
2 III 区 5 層上面 検出遺構  
3 III 区 北西部 7 層上面 検出  
遺構
- P L 7 1 III 区 南壁中央部 土層堆積状況  
2 IV 区 6 層上面 検出遺構  
3 IV 区 6 層上面 土坑・ピット
- P L 8 1 V 区 第 1 遺構面  
2 V 区 第 3 遺構面  
3 V 区 第 4 遺構面
- P L 9 1 VI 区 全景  
2 VI 区 微高地上の遺構状況  
3 VI 区 南西部近景
- P L 10 1 VI 区 土坑 S X34  
2 VI 区 土坑 S K89  
3 VI 区 掘立柱建物跡 S B01
- P L 11 I 区 包含層／溝 1 出土土器①
- P L 12 I 区 溝 1 出土土器②
- P L 13 I 区 溝 1 出土土器③
- P L 14 I 区 溝 1 出土土器④

P L 15 I 区 溝 1 出土木製品  
溝 5 出土土器

P L 16 II～IV 区 出土遺物

P L 17 V・VI 区 出土遺物ほか

## 挿図目次

- 図 1 調査区の設定状況 ..... 4
- 図 2 周辺の遺跡 ..... 7
- 図 3 調査区の地区割図 ..... 9
- 図 4 基本層序 ..... 10
- 図 5 I 区 平面図 ..... 12
- 図 6 I 区 溝 1 木製品出土状況 ..... 13
- 図 7 I 区 溝 1 断面図 ..... 13
- 図 8 I 区 包含層 出土遺物 ..... 14
- 図 9 I 区 溝 1 出土遺物① ..... 15
- 図 10 I 区 溝 1 出土遺物② ..... 16
- 図 11 I 区 溝 1 出土遺物③ ..... 17
- 図 12 I 区 溝 5 出土遺物 ..... 18
- 図 13 II～IV 区 土層断面図 ..... 21
- 図 14 II～IV 区 第 1・2 遺構面 ..... 23
- 図 15 III・IV 区 第 3 遺構面 ..... 25
- 図 16 III・IV 区 第 4 遺構面 ..... 26
- 図 17 II～IV 区 出土遺物 ..... 27
- 図 18 V・VI 区 土層断面図 ..... 29
- 図 19 V・VI 区 第 1・2 遺構面 ..... 30
- 図 20 V・VI 区 第 3・4 遺構面 ..... 32
- 図 21 V・VI 区 遺構図 ..... 34
- 図 22 V・VI 区 出土遺物 ..... 35

## 表目次

- 表 1 南部平野発掘調査履歴・概要 ..... 2・3
- 表 2 調査工程 ..... 4
- 表 3 土層と遺構面 ..... 10

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯と経過

調査区の存在する和歌山県日高郡南部川村は西牟婁郡と接し、南部川下流左岸に比較的広い平野が開けている。この平野部や周辺の丘陵部には縄紋時代から中世に至る多数の遺跡が営まれており、弥生時代末の大型銅鐸も6個出土している。中世には高野山領南部荘が設置され、八丁田圃と呼ばれている条里地割に区画された水田部にその景観を現在にまでとどめている。水田南部には室町時代後期に複郭式の巨大な城館である高田土居城<sup>註1</sup>が築かれている。このような遺跡の密集地において、以下に述べる各種開発工事が実施され、大規模な発掘調査が行われた。南部平野における発掘調査に至る経緯と経過を概観してみたい。

近年、和歌山県では交流圏の拡大を図るため、太平洋新国土軸、近畿南北連携軸、紀淡海峡交流圏等の新しい交流軸や交流圏の形成に向けた取り組みを行っている。さらに、県内における格子状の道路整備や道路と公共機関との有機的連携により、主要都市間を概ね2時間でつなぐ、県内2時間行動圏構想を推進し、県土の一体化を進めている。紀北地域と紀中・紀南地域を結ぶ主要幹線道路は複雑な海岸線を南進する国道42号線であるが、慢性的な渋滞が続いている。そのため、近畿自動車道紀勢線の早期延長が望まれており、御坊インターチェンジから南部インターチェンジまでの建設が事業化された。南部平野では、高速道路建設に伴い各種開発工事が一挙に開始された。高速道路への取付道路の整備、国道・県道・町村道の拡幅、河川改修などである。また、県と近畿農政局では総合的な農業基盤整備に着手し、南部町と南部川村では大規模な農業用地の区画整理が実施されることが決定した。

このような各種開発行為に伴う試掘確認調査と発掘調査は平成7年度から開始され、和歌山県文化財センターが実施した発掘調査面積は平成14年度までに72,663m<sup>2</sup>となっている（表1参照）。県内で一地域で発掘調査した事例では過去最大規模である。平成10年度からインターチェンジ本体部の調査が開始され、平成13年度まで毎年13,000m<sup>2</sup>前後が調査された。インターチェンジへの取付道路の整備など付随工事に伴う調査は平成13年度がピークで、平成14年度で南部平野における公共工事に関連する発掘調査はほぼ終息を迎えていた。また、マンション建設に伴う発掘調査など、民間工事に関連した調査事例も散見される。<sup>註2</sup>

本報告書で記述する国道424号線道路改築事業に伴う発掘調査は平成10年度に古川支線の東に隣接する料金所手前部1,612m<sup>2</sup>を調査し（I区）、平成12・13年度に国道から料金所までの取付部4,341m<sup>2</sup>を調査し（東からII・III・IV区）、平成14年度に取付部の一部544m<sup>2</sup>を調査した（V・VI区）。何れの調査区も縄紋時代から古墳時代にかけて集落が営まれた微高地や高田土居城跡から北西にややはざれており、湿地状の地形を呈する部分が多い。

表1 南部平野発掘調査履歴・概要

南部平野発掘調査履歴					
	事業名	委託機関名	対象遺跡名	1995年	1996年
A	近畿自動車道紀勢線南部 IC周辺所在遺跡確認調査	和歌山県道路建設課	徳蔵地区遺跡、高田土居城跡 ブゼン寺跡	234m <sup>2</sup>	300m <sup>2</sup>
B	近畿自動車道南部IC建設用地内徳蔵地区遺跡発掘調査	日本道路公団関西支社	徳蔵地区遺跡、高田土居城跡		
C	国道424号線道路改築事業に伴う徳蔵地区遺跡発掘調査	和歌山県日高振興局建設部	徳蔵地区遺跡		
D	県道上富田南部線整備に伴う徳蔵地区遺跡他発掘調査	和歌山県日高振興局建設部	徳蔵地区遺跡、高田土居城跡 大塚遺跡		
E	古川高速関連改修工事に伴う徳蔵地区遺跡他発掘調査	和歌山県日高振興局建設部	徳蔵地区遺跡		
F	南部莊園関連遺跡発掘調査	緑資源公団	徳蔵地区遺跡、大塚遺跡、熊岡II 遺跡、上坪遺跡、東吉田I・II遺跡		
G	県営排特南部南部川地区高田 土居城跡発掘調査（古川支線）	和歌山県日高振興局建設部	徳蔵地区遺跡・高田土居城跡		
H	熊岡遺跡（村道熊岡高原田線） 発掘調査	南部川村	熊岡II遺跡		
	*Cの調査は本報告書に記載			234m <sup>2</sup>	300m <sup>2</sup>
調査概要					
平成7年度 A-1995	徳蔵地区遺跡周辺で3m×3mの試掘坑を21地点、2m×2mを3地点、1m×9mを2地点に設定し、調査を実施。24地点で中世の遺物包含層を確認し、7地点で縄紋時代～中世の遺構を検出した。南西部で縄紋時代の遺構・遺物包含層が顕著である。				
平成8年度 A-1996	徳蔵地区遺跡周辺で3m×3mの試掘坑を32地点に設定し、調査を実施。基本層序は①層が耕作土、②層が床土、③層が灰色シルト、以下、粘土層、砂層、礫層である。③層が中世遺物包含層で、水田の可能性が高い。南部川右岸のブゼン寺跡のトレンチ調査では遺構・遺物ともに確認されなかった。				
平成9年度 B-1997	徳蔵地区遺跡北端の後背湿地部の1,700m <sup>2</sup> を調査した。15～16世紀の鋤溝・溝・土坑とそれ以前の自然流路を検出した。遺構は水田に関連するものと考えられ、現在の水田区画とはほぼ合致している。出土遺物の時期は弥生時代から中世に及ぶが、15～16世紀のものが多く、高田土居城との関連が指摘できる。				
平成10年度 B-1998	徳蔵地区遺跡の北東部と中央部の17,693m <sup>2</sup> を調査した。縄紋時代晚期から弥生時代前期にかけての竪穴住居跡・溝・自然流路及び古墳時代初頭の水田跡と付随する溝・木杭列を検出。鎌倉時代の水田を検出し、水田が15世紀代に変化している状況を確認した。				
平成11年度 B-1999	徳蔵地区遺跡の中央部の12,711m <sup>2</sup> を調査した。弥生時代前期の掘立柱建物・土坑と高田土居城跡の外郭部の北辺と東・西辺の大規模な外堀を検出した。北・西辺は2重で、東辺は3重の堀であり、防御機能とともに用水・排水機能も兼ねているものと推定された。高田土居城は複郭式で東西160m・南北220mの大規模な平城である可能性が高まった。				
平成12年度 B-2000	徳蔵地区遺跡の東部を中心として13,148m <sup>2</sup> を調査した。縄紋時代中期前半の集落、縄紋時代後期前半の集落、弥生時代前期の竪穴住居、古墳時代前期の集落などを検出。関東・東海・中部高地・四国などから搬入された土器・石器が確認され活発な交流がうかがえる。縄紋時代の埋甕墓と配石墓が検出され、当時の墓制が明らかになった。				
平成13年度 B-2001	徳蔵地区遺跡の中央部及び北部・西部の13,167m <sup>2</sup> を調査した。西部では弥生時代前期の木材を加工し組み合わせた井堰を検出した。室町時代の高田土居城跡北外郭部では溝で区画された屋敷地から、掘立柱建物・井戸・埋桶などを検出し、東辺の外堀から橋脚遺構や土留め材など、当時の土木技術を復元する資料が発見された。高田土居城跡廃絶後に構築された井戸枠には完全な形の溶解炉の炉体が転用されていた。				

南部平野発掘調査履歴							
1997年	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	合計	参考文献
						534m <sup>3</sup>	文化財センタ一年報 1995 1996
1,700m <sup>3</sup>	16,081m <sup>3</sup>	12,711m <sup>3</sup>	13,148m <sup>3</sup>	13,167m <sup>3</sup>		56,807m <sup>3</sup>	文化財センタ一年報 1997~2001
	1,612m <sup>3</sup>			4,341m <sup>3</sup>	544m <sup>3</sup>	6,497m <sup>3</sup>	文化財センタ一年報 1998 2001 2002
				2,530m <sup>3</sup>		2,530m <sup>3</sup>	文化財センタ一年報 2001
				2,234m <sup>3</sup>	2,399m <sup>3</sup>	4,633m <sup>3</sup>	文化財センタ一年報 2001 2002
				216m <sup>3</sup>	1,014m <sup>3</sup>	1,230m <sup>3</sup>	文化財センタ一年報 2001 2002
					202m <sup>3</sup>	202m <sup>3</sup>	文化財センタ一年報 2002
					230m <sup>3</sup>	230m <sup>3</sup>	文化財センタ一年報 2002
	17,693m <sup>3</sup>	12,711m <sup>3</sup>	13,148m <sup>3</sup>	20,478m <sup>3</sup>	4,389m <sup>3</sup>	72,663m <sup>3</sup>	
調査概要							
平成13年度 D-2001	高田土居城跡の内郭部等2,530m <sup>3</sup> を調査した。内郭部は幅約10mの堀に囲まれた南北約50m・東西約70mの空間である。内郭と外郭は鎌倉時代の2町半に及ぶ水田を潰して造成している。内郭部では幅2m・厚さ0.2mの土壙基底部を検出した。多数の柱跡が確認され、掘立柱建物が存在し、礎石建物も1棟確認された。一時期古く、条里地割に平行する堀も内堀の外側で確認した。						
平成13年度 E-2001	古川右岸の2,234m <sup>3</sup> を調査した。梅田橋より下流の丘陵末端部では古墳時代初頭の竪穴住居跡4棟と溝1条を検出した。橋より上流の谷部では南東から北西に流れる幅12mほどの縄紋時代後期と考えられる自然流路を検出した。西側では徳蔵地区遺跡からつづく微高地の端部が確認された。縄紋時代後期の土坑が検出され、土器・サヌカイト片が多く出土した。						
平成13年度 F-2001	八丁田圃の南部から南東部にかけての水田地帯と南東側の丘陵裾部に2×2mの試掘坑を54地点に設定し、調査を実施。熊岡の丘陵裾部では、縄紋時代から近世にいたる多種多様な土器が出土した。東吉田の小丘陵周辺では縄紋時代の土坑を確認した。南部の水田地帯は湿地状の地形で、自然流路や小河川と推定される堆積を数地点で検出し、中世の水田層も広範囲に確認された。南西の段丘から西に延びる微高地では、縄紋時代の土坑を検出し、縄紋時代から中世にかけての頗著な遺物包含層を確認した。						
平成14年度 F-2002	八丁田圃南部の水田地帯と南側の微高地に2×2mの試掘坑を60地点・水田畦畔確認のための4×4mの試掘坑を6地点に設定し、調査を実施。熊岡地区と東吉田地区では4地点で本調査を実施。熊岡地区では古墳時代の溝・ピット、鎌倉時代の溝等を確認した。弥生土器や製塩土器等も出土した。東吉田地区で弥生時代から中世にいたる溝・ピット・井戸を検出し、自然流路から庄内期から古墳時代前期にかけての土師器が多数出土した。上坪遺跡隣接地の試掘坑で、古墳時代と推定される溝を検出した。						
平成14年度 G-2002	古川支線の改良工事に伴い、高田土居城の西側外堀確認のための調査を実施した。支線の西堤に沿って北から幅2.6~4.0mの第I・III・II工区を設定した。調査地点近辺は自然流路が存在し、近世の堆積土によって、大きく攪乱されていた。外堀の堆積土や西肩部と推定される遺構を一部確認した。						
平成14年度 H-2002	熊岡地区で南部川村村道拡幅工事に伴い、幅2~3m・長さ約100mにわたり調査を実施した。調査区の北半部では中世のピット・土坑・溝等を検出した。ピットは径30cm前後・深さ10~30cm程度で、約2m間隔で直線に並ぶものがみられ、掘立柱建物である可能性がある。出土遺物は中世の土器類や陶磁器が主体を占めるが、須恵器や弥生土器、少量の縄紋土器がある。						

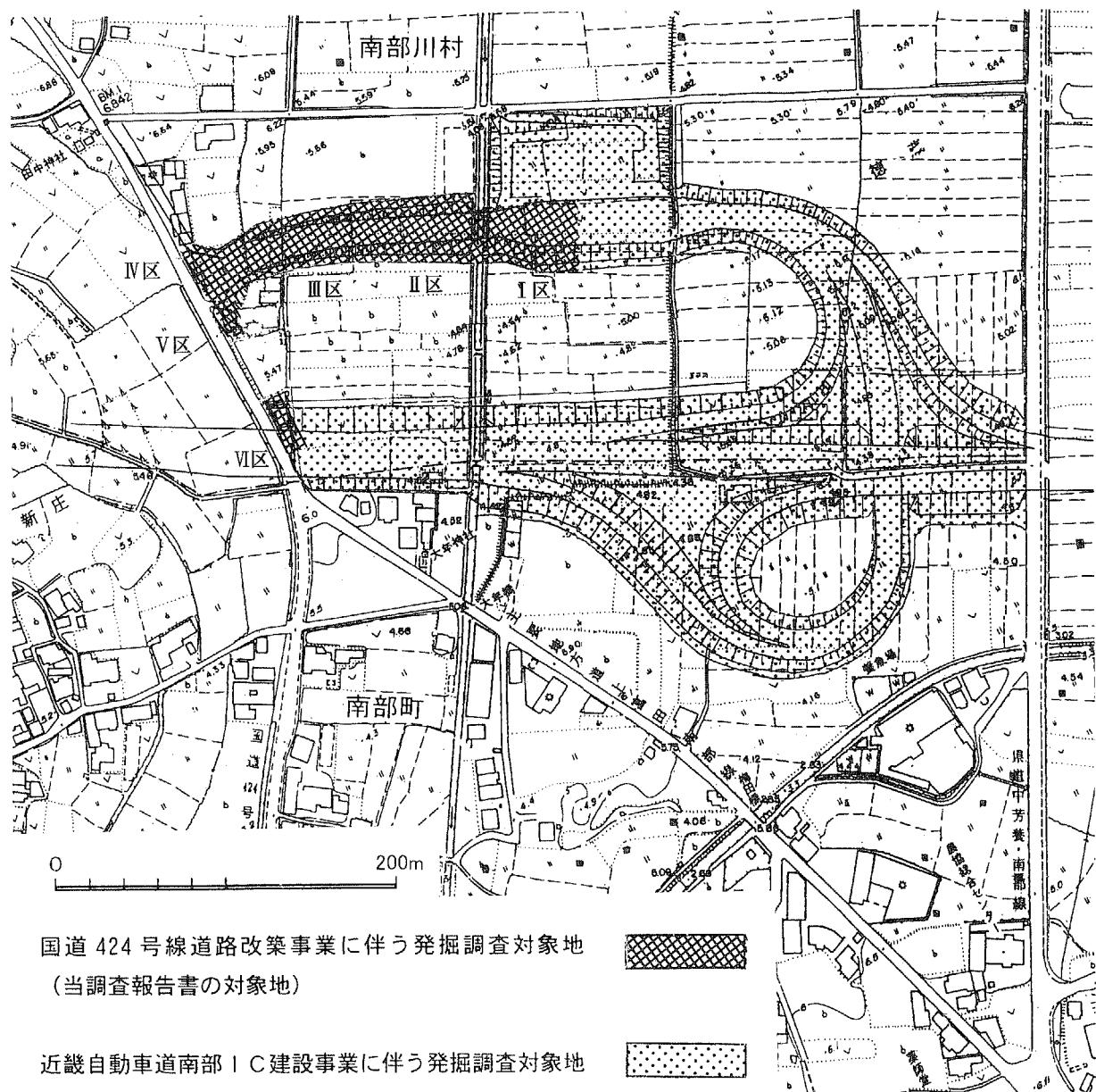


図1 調査区の設定状況 (1 : 4,000)

表2 調査工程

調査区	1998			1999			2001			2002															
	10	11	12	1	2	3	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12				
I 区																									
II 区																									
III 区																									
IV 区																									
V 区																									
VI 区																									

## 第2節 位置と環境

### (1) 位置

徳蔵地区遺跡の所在する南部平野は和歌山県中央部の海岸寄り、南部川左岸下流域に位置する。平野は南部川村から南部町にかけて東西1.5km、南北2.5kmの範囲を有し、周囲を標高100～200mの丘陵に囲まれている。

徳蔵地区遺跡は平野南端の旧河川が収束する地点にあたり、旧地形では微高地状の地形を呈していたものと考えられる。当報告書の調査対象地区は、遺跡の所在する微高地の北から西にかけての縁辺部付近に相当する。地籍は南部川村徳蔵字向流・下流・斎藤にあたり、標高は5～5.5mである。

調査地は、JR南部駅から北に約1.5km、徒歩約20分の位置にある。和歌山・御坊方面から国道42号線で向かうと、南部町内に入り南部川を超える。南道の交差点を左折すると、国道424号線に入る。約1.5kmで県道上富田南部線と交わるが、この交差点から道に沿って右側が調査した地点である。

### (2) 地理的環境

まず、南部地域の地質について概説する。西南日本は中央構造線によって内帶（日本海側）と外帶（太平洋側）に分けられる。外帶はさらに、仏像—糸川構造線によって南北に分けられ、南側を四万十区と呼ぶ。南部地域はこの四万十区に属する。さらに細かくみると、南部地域は北部山間地が日高川帯、中央部が音無川帯、海岸寄りが牟婁主帶と田辺層群に属している。

南部川村から南部町まで広がる平野部は、南部川とその支流である古川の堆積により形成されている。南部川村の住宅地は、河川の自然堤防及び丘陵縁辺部に立地している。また、南部町の中心となる市街地は、海岸沿いに発達した砂堆の上に形成されている。

日高郡南部川村は和歌山県の中央部に位置する村で、面積は約94km<sup>2</sup>、人口は約6,900人、北は日高郡竜神村、西は日高郡印南町、東は西牟婁郡中辺路町と田辺市、南は日高郡南部町と接している。村域を南北に南部川が貫流しており、下流域の南部平野を除き、大半を丘陵地・山地が占めている。丘陵一面に梅畠が作られており、日本一の梅の産地として夙に有名である。また、備長炭の生産も行われている。南部川村は、日高郡の中心である御坊市内よりも田辺市に近く、文化・商業面でも田辺市との関係が強い。

現在、徳蔵地区遺跡の周辺は条里型地割の整備された八丁田圃として知られており、一面に平坦な水田が広がっている。集落は相対的にやや高燥な地を選んで立地しているが、それとて水田との比高差は1mほどしかない。このような平坦な地形となったのは中世の南部平野の大規模な水田化に伴うもので、それ以前の南部平野は自然河川の流れる低湿地と微高地からなる複雑な地形を呈していたものと考えられる。

### (3) 歴史的環境（図2）

南部平野の旧石器時代から縄文時代前期までの遺跡はいまだ知られていない。縄文時代中期・後期の遺跡としては、当遺跡（旧高田遺跡・梅田遺跡周辺）のほか、岡の段遺跡、新庄遺跡、大塚遺跡註3などが知られている。また、縄文時代晚期の遺跡としては、当遺跡（旧徳藏遺跡・大年遺跡）註4のほか、片山遺跡が知られている。これらの遺跡からは突帯紋土器が出上し、弥生時代前期まで続くものと考えられる。

弥生時代中期の遺跡としては、片山遺跡・高見遺跡が知られる。片山遺跡では土坑と溝状遺構が多数確認された。また、田文字遺跡・津殿遺跡・青蓮谷遺跡・上の尾遺跡から石器類が出土している。

南部平野をとりまく丘陵上には、6箇所の銅鐸出土地がある。銅鐸は弥生時代中期から後期にかけての大型品であり、和歌山県北部よりも遅い時期に導入されたものと考えられている。周辺の丘陵からは梅畠開墾に伴い土器が多量に出土したらしく、弥生時代中期から後期にかけての高地性集落が存在したものと推定される。

弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡としては、大塚遺跡、片山遺跡が知られている。大塚遺跡は南部平野下流域の比較的大規模な集落跡であり、このころに整穴住居跡が円形から方形へと移行する状況が確認されている。また、片山遺跡は墓域であり、方形周溝墓が確認されている。註5この二つの遺跡からは陶質土器が出土しており、紀ノ川筋や朝鮮半島との交流を物語っている。

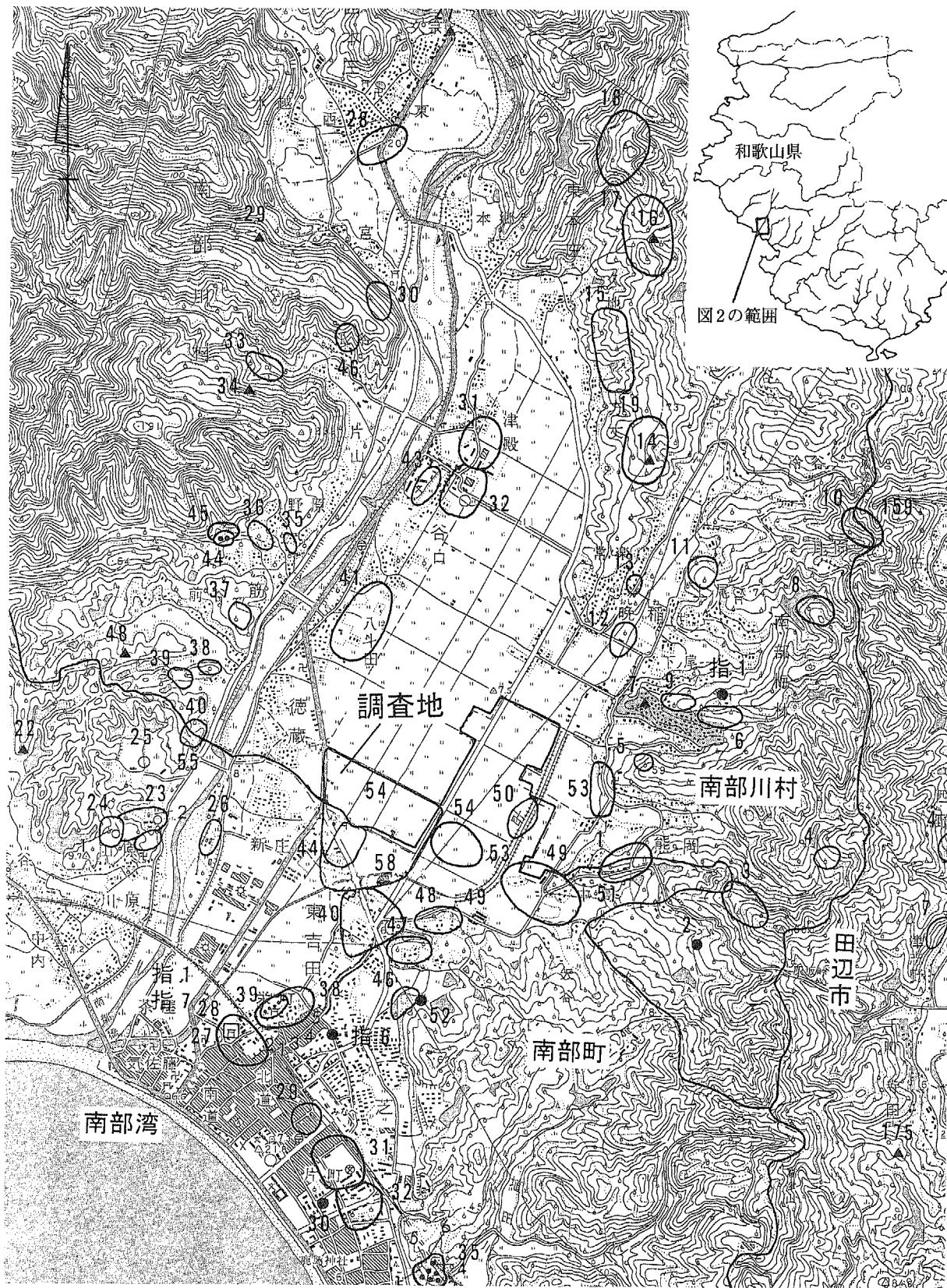
東吉田I遺跡では島状微高地と古墳時代前期の溝等が確認されており、上坪遺跡においても古墳時代の微高地の存在が想定されている。註6古墳は集落域よりも海岸に近い場所にあり、城山古墳群、芝古墳群、埴田古墳群等が散在する。また、製塩遺跡として、大目津泊りI遺跡註7が著名である。

奈良・平安時代の遺跡としては、起請ヶ谷窯跡、閉谷窯跡が知られる。平安時代になると熊野三山への参詣が盛んになり、南部王子社等の王子社が建立された。奈良・平安時代の遺跡は他の時代よりも確認例が少ない。

平安時代末から鎌倉時代になる頃には、南部平野は南部荘として開発され、以後高野山領として室町時代まで存続する。当該時期の景観については、近年文献等からの検証も行われ、成果があげられている。註8なお、現在みられる整然とした水田景観は、鎌倉時代の条里型地割りに基づくものであることが確認されている。

室町時代後期には平須賀城跡や高田土居城跡等大規模な城館が建造されており、大規模な発掘調査が実施されている。註9

江戸時代には、徳藏地区遺跡（旧梅田遺跡・大年遺跡）に鑄造関連の技術者が住んでいたという記録があり、付近からは鑄造に関連するとみられる土坑や焦土が確認されている。註10



- 調査地 徳藏地区遺跡（南部町 58・南部川村 54） 0 1km
- 南部川村 29雨乞山銅鐸出土地 31津殿遺跡 36田文字I遺跡 39青蓮谷遺跡 40ブゼン寺跡  
41八斗田遺跡 53熊岡II遺跡
- 南部町 23城山古墳群 24起請ヶ谷窯跡 25閉谷窯跡 26新庄遺跡 27三鍋王子跡 28高見遺跡  
32片山遺跡 35埴田古墳群 39芝古墳群 40大塚遺跡 44高田土居城跡 47岡の段遺跡  
50上坪遺跡 53東吉田I遺跡 54東吉田II遺跡 55ブゼン寺跡

図2 周辺の遺跡 (1 : 25,000)

## 第3節 調査の方法

### (1) 調査の方法

発掘調査業務は当センターの調査員が現場での指揮にあたり、掘削等の土木工事は工事請負方式により業者へ発注し、記録の作成については補助員を直接雇用して業務を実施した。調査は試掘データをもとに、近世以降に形成された層は機械で掘り下げ、中世以前の遺物包含層及び遺構を人力で掘削した。

#### 遺跡の名称と範囲

従来、調査区周辺の遺跡は、徳蔵遺跡・大年遺跡・高田遺跡・梅田遺跡・古川遺跡・高田土居城跡などが知られており、徳蔵地区遺跡という名称の遺跡は存在していなかった。しかし、近畿自動車道の建設に関連して試掘調査・本発掘調査が行われ、従来の遺跡範囲外に調査が及ぶに至り、縄紋時代から中世の南部荘に関連する時代までを対象とした複合遺跡として、本発掘調査の<sup>註11</sup>実施された範囲全体を徳蔵地区遺跡として括ることになった。遺跡の範囲設定後も周辺における調査は継続されており、今後も遺跡の範囲変更が生じる可能性が高い。

#### 調査区名（図1・3）

徳蔵地区遺跡では現場に応じて、年度や調査順序を示す数字・アルファベット・方位等により名づけた調査区名を用いてきた。この調査区名は一定の法則性に適っておらず、欠番等も多いことから、国道424号線の改築工事に伴う調査のみについて、調査区名を振り直すこととした。調査区名は南部インターチェンジ料金所予定地から東へⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅳ区と続き、そこから南へⅤ区、Ⅵ区という順序で設定した。各調査区はそれぞれⅠ区が平成10年度の3A区、Ⅱ～Ⅳ区が平成13年度の1～3区、Ⅴ・Ⅵ区が平成14年度のA・B区に対応している。

#### 地区割り（図3）

地区割りは国土座標第VI系のX = -246,100、Y = -61,500を基点に、100mごとの大区画と、4mごとの小区画を用いて設定した。大区画は北から南へ1・2・3…、東から西へA・B・C…と順番に振り、徳蔵地区遺跡全体をカバーしている。今回の調査地の大区画は3G・4G・3H・4H・3I・4I区である。小区画は、北から南へ1・2・3…・25、東から西へa・b・c…・yと順番に振り、一つの大区画を東西と南北に25等分している。大区画と小区画を組み合せた表示（例えば3H20bなど）に基づいて、遺物の取り上げを行っている。

#### 遺構の名称

遺構番号は各調査区ごとに付けている。Ⅰ・V・VI区では検出した遺構すべてに番号を付けているが、Ⅱ～IV区では遺物の出土した遺構のみに遺構番号を付けている。

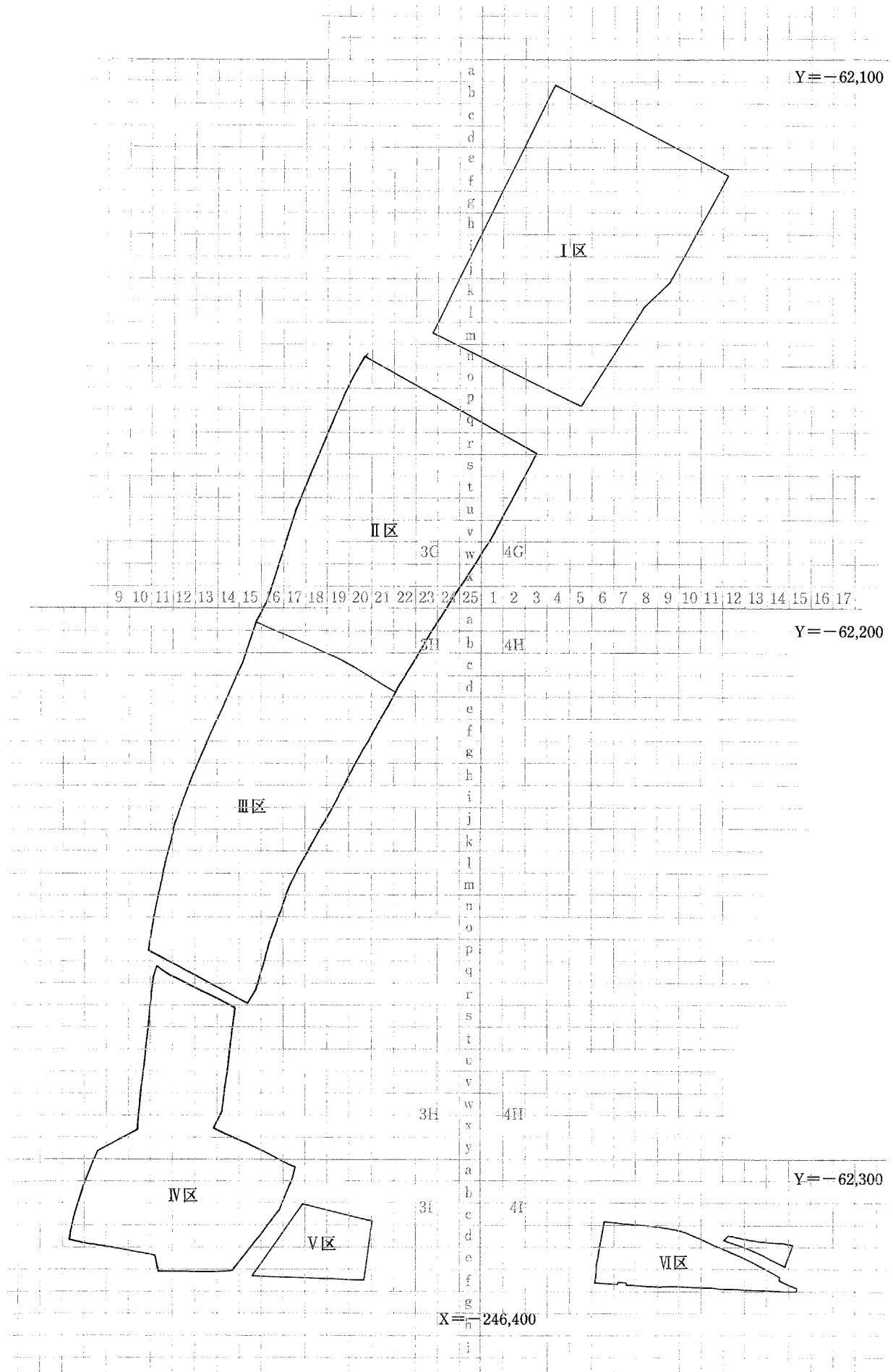


図3 調査区の地区割図 (1 : 1,000)

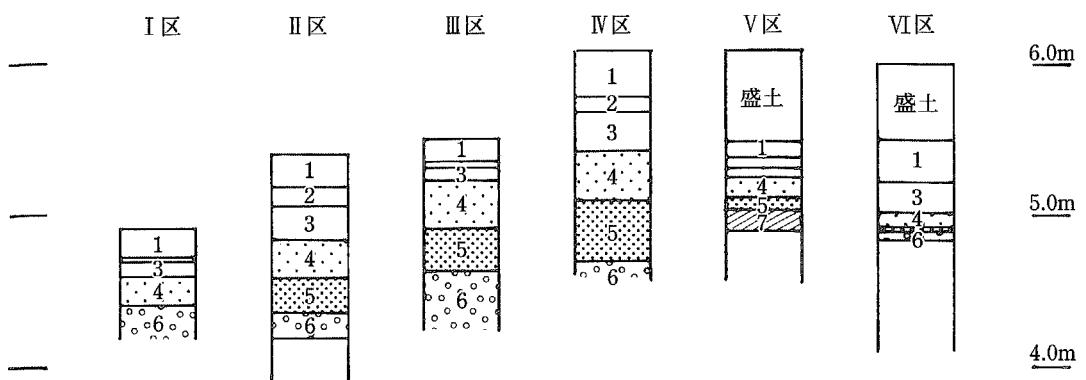


図4 基本層序 (1:50)

表3 土層と遺構面

層名		土色名と土性	Munsell notation	土層の内容	
1層		灰色砂質土	2.5Y4/1	現代の耕作土	
2層		明黄褐色砂質土	2.5Y6/8	現代の床土	
3層		褐灰色砂質土	10YR4/1	近世の耕作土	
4層		褐灰色～黄灰色粘質土	10YR4/1～2.5Y6/1	中世の水田耕作土	
5層		黒褐色～にぶい黄褐色粘土	10YR3/1～4/3	古墳～平安時代の遺物包含層	
6層		黄褐色～オリーブ褐色粘質土	2.5Y4/1～4/3	弥生時代の遺物包含層	
7層		灰黄褐色～オリーブ褐色砂質土	10YR4/2～2.5Y4/4	縄紋時代晚期の遺物包含層	
8層		褐灰色～褐色粘質土	10YR5/1～4/4	地山	

遺構面	I 区	II 区	III 区	IV 区	V 区	VI 区
3層上面					近世	近世
4層上面		中世	中世		中世	中世
5層上面	—	(古墳～古代)	平安	(古墳～古代)		(古墳～古代)
6層上面	(弥生後期～庄内)		(弥生)	(弥生)	(古墳)	古墳後期
7層上面			(縄紋晚期)	(縄紋晚期)		
8層上面					縄紋晚期	縄紋晚期

#### 層序と遺構面 (図4・表3)

各年度の調査ごとに平成10年度には6層、平成13年度には7層（細分すると168層）、平成14年度には8層を確認している。各調査区の土色と土性、標高、出土遺物等を勘案して、次の8層に分類した。

1層は現代の耕作土で灰色の砂質土、2層は床土で明黄褐色の砂質土である。I区ではこの下にかさ上げ土が盛られていた。3層は近世の陶磁器が出土する耕作土で、砂質が強いものと粘質の強いものがある。粘質で床土のあるものについては水田耕作土と考えられるが、砂質のものについては畑の耕作土とも考えられる。鍬溝等の痕跡も数箇所で確認されている。4層は中世の水田耕作土層である。3層よりも粘質であり、鉄分及びマンガンの酸化した粒を多く含んでいる。畦畔はII区等で確認している。4層は上下2層ある場合が多く、出土遺物は僅少であるが、上層

を室町時代（4a層）、下層を鎌倉時代（4b層）と考えている。5層は黒褐色～にぶい黄褐色の粘質土あるいは粘土であり、水田開発前の湿地状の堆積を示している。出土遺物は微量であるが、黒色土器や土師器、須恵器が出土する。中世水田開発以前に微高地であった場所については、褐色味の強い遺構面が形成されており、縄紋時代から古墳時代までの遺構が確認できる。6層は黄褐色～オリーブ褐色の粘質土であり、弥生時代の堆積である。当報告書対象地内では、良好な遺構はみられず、出土遺物も少ない。7層は灰黄褐色～オリーブ褐色の砂質土であり、縄紋時代晚期の突帯紋土器のみを含む包含層である。遺構とみられる土坑・ピットはあるが、残存状態は良好ではない。8層は褐灰色～褐色の粘質土であり、遺物は確認していない。しかし、6・7層と同様の堆積土であり、縄紋時代晚期以前の遺物を含むことも十分に考えられる。

このような基準に従って各調査区の該当する層を統合してまとめたのが、図4の土層図、層序と遺構面の表である。一部の遺構面には時期の判然としないものがあったが、その場合は包含層の年代を考慮して（ ）の中におおよその時期を充てている。

## （2）整理の方法

整理事業は当センター担当者が、整理補助員・整理作業員を直接雇用して業務にあたった。一部の整理作業については、発掘調査と併行して応急整理として現地で整理を実施した。整理作業の概要は次のとおりである。

洗浄・注記・分類・登録については、出土遺物すべてについて実施した。注記は凡例で示した調査コードと登録番号を記載したが、3cm以下の細片については登録番号のみを注記した。登録は取り上げ単位ごとに番号を付けた。

接合は基本的に、取り上げ単位内に口縁部あるいは底部を含む破片がある場合実施している。復原・補強は基本的に、報告書に掲載する遺物を対象として、写真撮影・保管の上で必要な個体について行った。また、報告書作成に伴い、遺物実測、トレース、組版等の作業を行った。

### 保管状況

出土遺物は平成10年度分が8ケース、平成13年度分が10ケース、平成14年度が4ケースあったが、報告書掲載分8ケース、その他26ケースに再整理して保管している。写真は現場では、6×7版モノクロネガ、35mmカラースライド、35mmカラーネガのフィルムを用いて撮影を行い、遺物写真は6×7版モノクロネガフィルムで撮影した。

遺構の実測図は平成10年度9枚、平成13年度64枚、平成14年度23枚を調査年度ごとにファイルし、遺物実測図110枚はファイル1冊にまとめた。遺物台帳、調査日誌は調査現場において作成した原本にて保管している。

これらの資料は和歌山県文化財センターで保管しているが、出土遺物については木製品の保存処理を実施した後に、和歌山県教育委員会に移管される予定である。

## 第2章 調査の成果

### 第1節 平成10年度の調査（I区）

近畿自動車道南部インターチェンジ（仮称）の料金所国道側部分の調査である。

#### （1）層序

現状は、水田である。第1層現代水田層、第2層床土、その下に盛土、第3・4層旧水田層、第5層黄褐色シルト層で遺構を検出した面である。盛土は、現在の水田層をかさ上げするために盛られた土である。調査区の西半分はこの盛土層工事の際に、旧水田層である第3・4層を掘削しており、残存していない。旧水田層は、調査区の東半分のみに部分的に残存する。

#### （2）遺構と遺物（図5）

調査区の東側で溝を4条確認した。溝1は庄内期（弥生時代から古墳時代への移行期）、溝5は弥生時代後期の遺構である。

#### 3・4層旧水田層遺物（図8）

調査では、層的な区分をせず、3・4層を同時に掘削しており、層による出土遺物の区分は出来ない。弥生土器、土師器、瓦器、須恵器、国産陶磁器、白磁、青磁、瓦などがある。層としては中世・近世の時期である。須恵器は、6世紀中葉の坏身（図8の1）、7世紀の宝珠つまみがつく坏蓋（2）、奈良時代の坏蓋（3・4）がある。5は白磁で、6は青磁碗である。

#### 溝1（図6・7）

調査区を南北に横切る形で検出した大溝である。断面形状は緩やかなV字形を呈する。

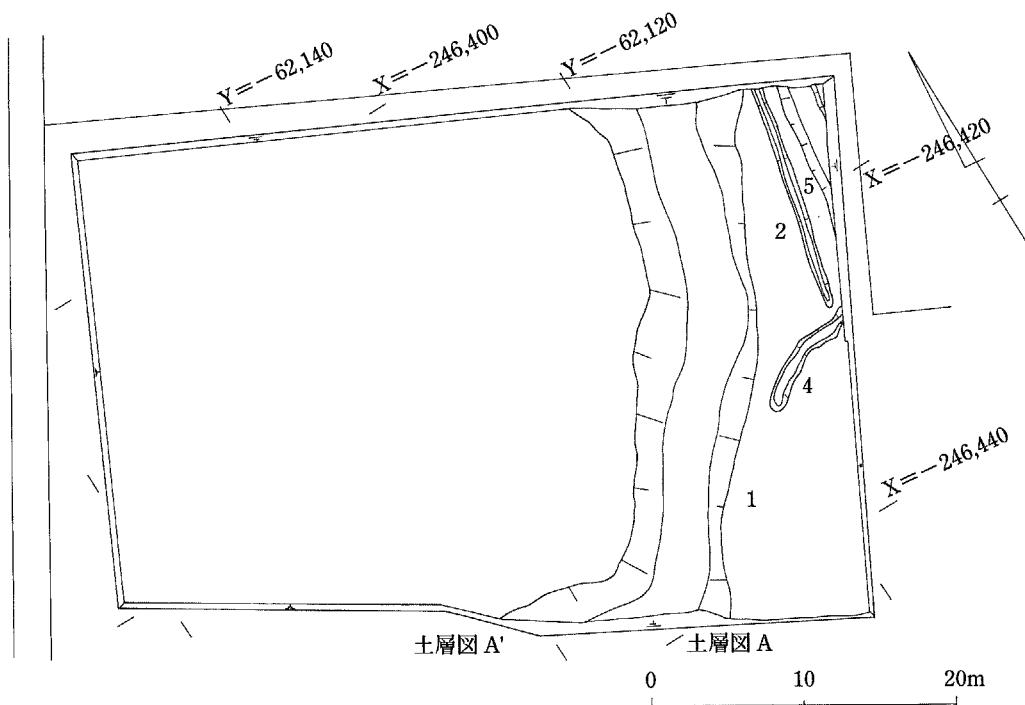


図5 I区 平面図（1：500）

北側での幅11m、深さ1.7m、中間での幅7m、深さ1.8m、南側での幅8m、深さ2mである。地形が北から南に低くなっているため、水の流れる方向は、北から南に流れる。肩部はなだらかに落ちる。溝の南端部、とりわけ西側の肩部は、二段に落ち、上段は浅くなっている。下位の第5層を除くと更に第6層を切り込み面とした溝1より更に規模の大きな流路が確認できる。

堆積土は、土質・色調により、大きく3層に区分できる。上層はシルト層で、中層・下層は粘土層である。下層中には両肩から落ちた土が堆積する。各層は細かく区分でき、中層・下層は流れ堆積の状況を呈する。溝の中央部付近の下層中より大量の木器片や炭片が一括して出土した(図6)。径15cm前後の柱状の木器が数本あり、他の多くの木器は、径5cm前後の細長い棒状の木器である。有頭棒などもある。多くの木器は、溝に直行する形で、他はそれらに上流より流れてきたものが堰き止められた状態で出土した。鳥形木製品と考えられる遺物も出土した。

調査は、上層から下層まで3層に区分して調査した。出土遺物は、土器・木器がある。遺物の

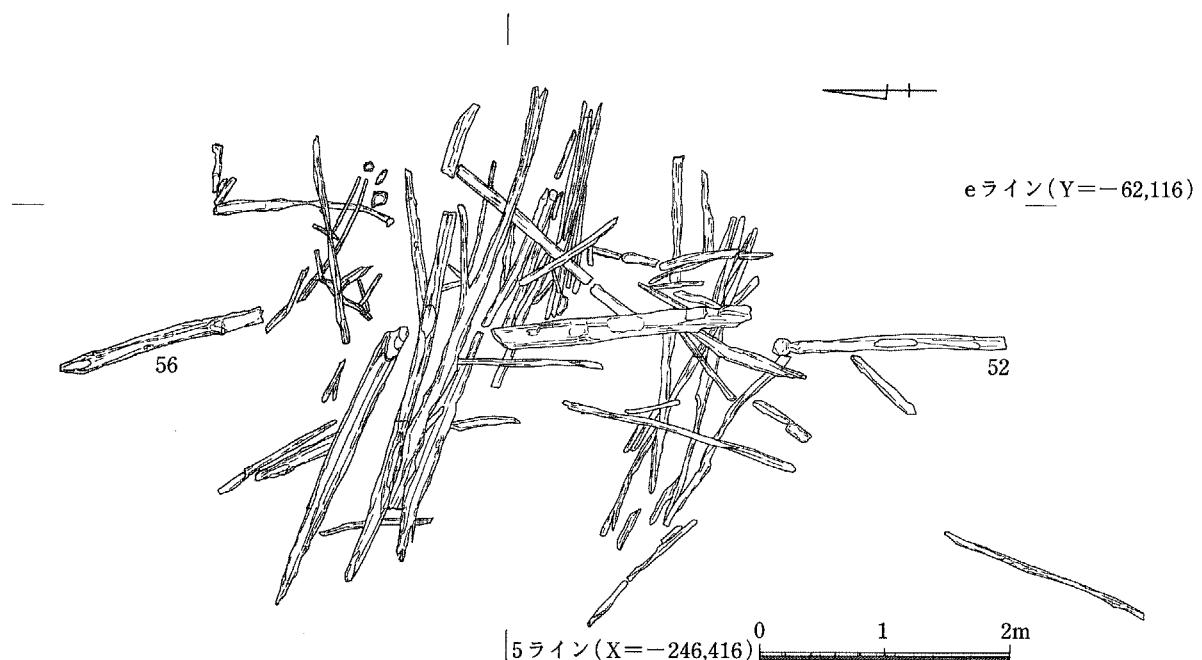


図6 I区 溝1 木製品出土状況 (1:60)

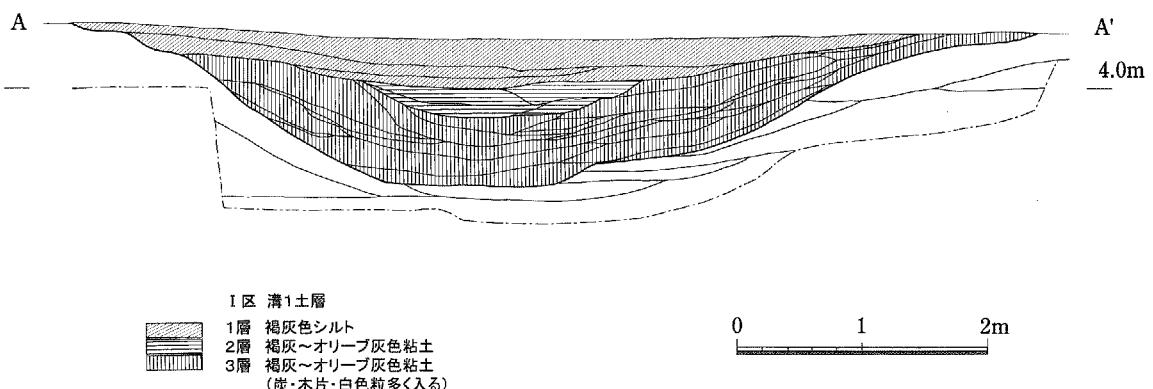


図7 I区 溝1 断面図 (1:60)

量は下層が多く、上層が少ない。木製品は下層中に多く出土した。土器の色調は、全体に淡い黄褐色が多く、微量の赤褐色系の土器もある。

#### 溝1 3～1層出土遺物（図9～11）

他の層に比較して遺物の量が多い。壺、甕、高坏、鉢がある。第3層～1層の層的な区分はあるが、時期的には違わない。

第3層出土の甕（25～41）は、くの字形に屈曲する口縁部をもつ。体部外面の叩きは、粗いものと細かいものがある。右上がりや水平方向の叩きである。口径に大小がある。口縁部には刻み目を施すものがある。外面には体部から口縁部上端まで煤の付着がある。内面には煤は付着しない。底部は丸底化した（40・41）などがある。第2層出土の甕（42・43）は、細かい叩きをもつ42と上げ底の底部破片（43）である。第1層出土の甕（44～46）は、くの字形に屈曲し直線的に延びる口縁部（44）と底部破片（45・46）である。細かい叩きで口縁部直下まで存在し、口縁端部は粘土を貼り付け継ぎ足している。底部径は小さい。ドーナツ底になっている。土器の色調は、淡い黄褐色を呈する。

第3層出土の壺（7～13）は、中期に特徴的な凹線紋を口縁部に持つ直口壺（7）、口縁端部に擬凹線を施し、2個一対の円形浮紋を付ける広口壺（8）、二重口縁壺（9）、外反する口縁部をもつ小さな壺（10・11）がある。広口壺は、2点のみの出土で、非常に少ない。磨きをもつ底部（12・13）も出土する。第1層出土の壺（14・15）は、直立する口縁部がなだらかに外反し、外面に横方向の叩きをもつ球形の体部の15と直口壺の14がある。

第3層出土の高坏（16～24）は、脚柱部が長いもの（23）と短いもの（16・17・20・21）、中実（16・22・24）と中空（17・20・21・23）がある。裾部に穿たれた孔は、1.5cm程度である。坏部は、塊状のもの（16～18）と屈曲して伸びるもの（19）とがある。塊状の坏部には、口縁端部で外反する珍しい形態のものがある（16）。

磨き調整は粗く、脚柱部、裾部は縦方向に磨く。

#### 第3層出土の鉢（47～49）と第

1層出土の鉢（50）がある。台付のもの（49・50）がある。47は、口縁部の破片である。鉢は、他の器種に比較して量的には少ない。

第3層出土の木器は、有頭棒（51～57・69）そのうち杭状部の残るもの（54・55・56・58）、板材（61～63）、棒（64～68）、鳥形

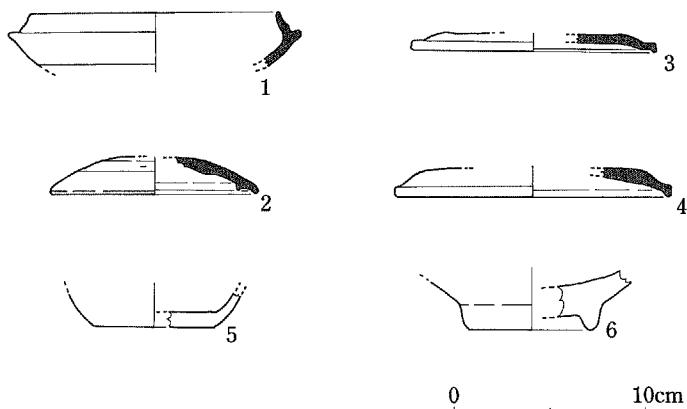


図8 I区 包含層 出土遺物（1：4）

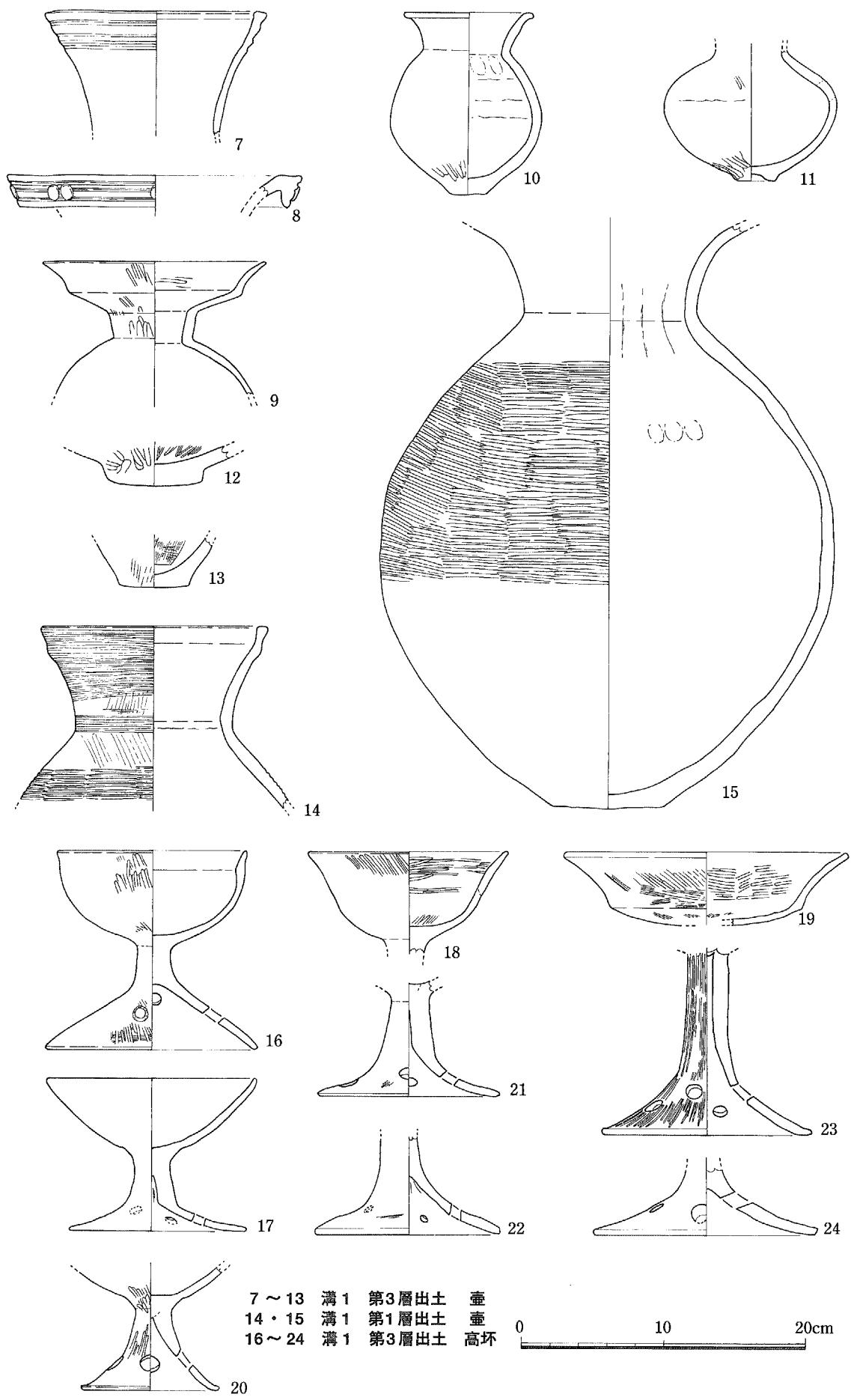
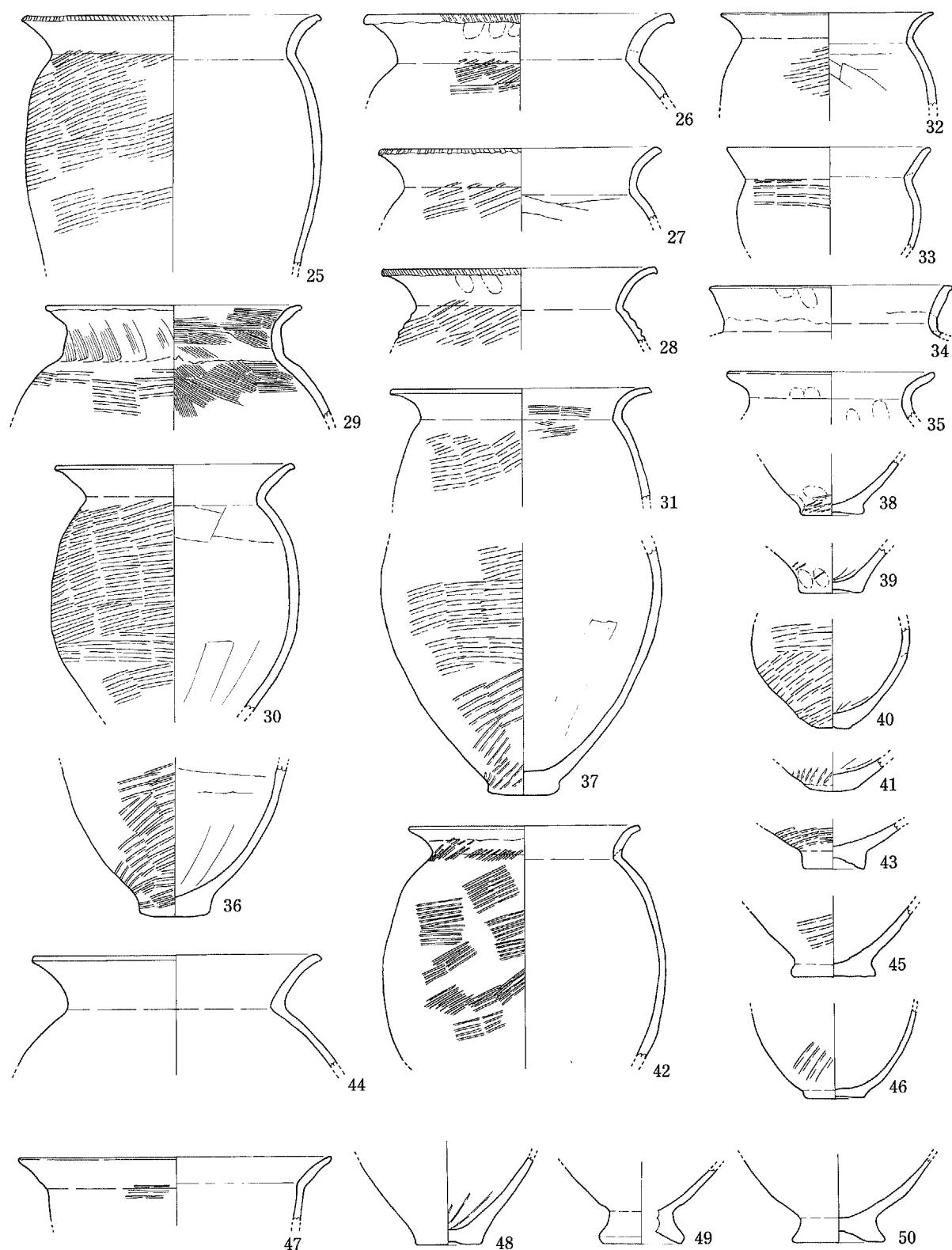


図9 I区 溝1 出土遺物① (1 : 4)



25 ~ 41 溝 1 第3層出土 壺  
42 ~ 43 溝 1 第2層出土 壺  
44 ~ 46 溝 1 第1層出土 壺

47 ~ 49 溝 1 第3層出土 鉢  
50 溝 1 第1層出土 鉢

0 10 20cm

図10 I区 溝1 出土遺物② (1 : 4)

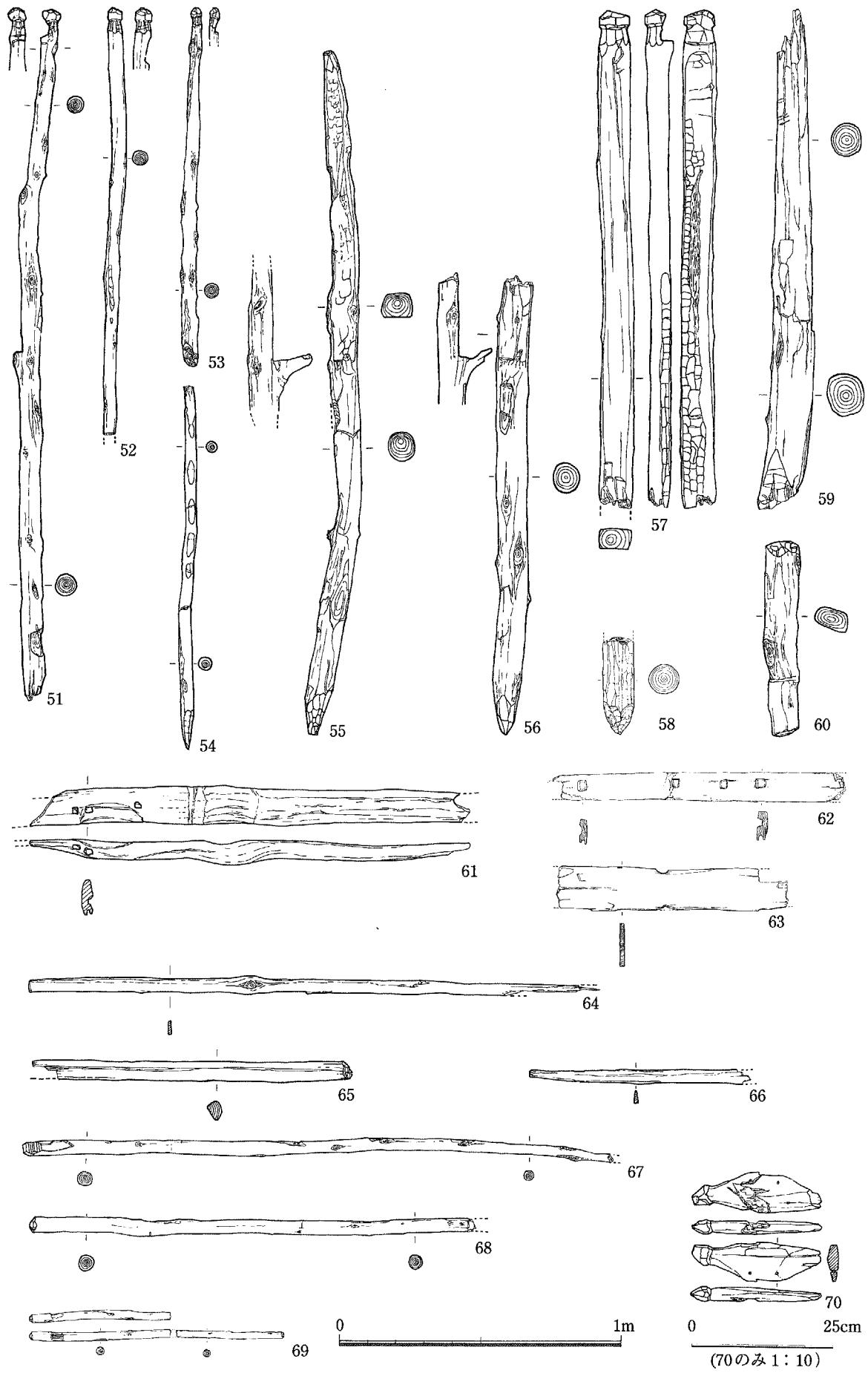


図11 I区 溝1 出土遺物③ (1:20)

(70)などがある。有頭棒は、杭状に尖らし、他方を有頭にしている。55・56は、大型品で、杭状に尖らした部分より上120cm程度の部分に、枝を残し、支えの部分としている。組み合わせて、柵などに使用したと想定できる部材である。57は、他の棒状の有頭棒とは違い、角材に加工している。58は、杭であるが丁寧に表面部分を加工している。60は、両端を平坦に加工しており、用途が不明である。61は板材であるが、片面に孔を途中まで穿っており、貫通しない。62も板材であるが、四角な孔を4穴、板材を貫通させずに穿っている。63は板材で、丁寧な加工を施す。64は、板状の角材である。65は、二面のみ削り、片面は自然面を残し棒状にしている。節は取り除いている。67は、杭で細長い。杭部分は、一面削り尖らせている。68は、節を取り除いた棒である。69は、片面を浅く削り、有頭にしている。70は、鳥形と考えられる木製品である。片面を削り平坦にしており、他面は二面に区分して削っている。孔を2穴穿つ。何かにとめるための穴と考えられる。

#### 溝 2

溝1と溝5の間で検出した幅0.7m前後、深さ0.2mの浅い溝である。堆積土はシルト層で一層である。出土遺物はない。

#### 溝 4

溝2の南側で検出した幅0.6~1.1m、深さ0.2mの浅い溝である。堆積土はシルト層で一層である。出土遺物はない。

#### 溝 5

溝5は、溝2に平行して検出した小溝である。幅2.6m、深さ0.5mを測り、断面U字形を呈する。堆積土は4層に区分できる。最下層には遺物が集中する。各層はシルト層で、最下層は粘土層である。各層共に炭が混ざる。

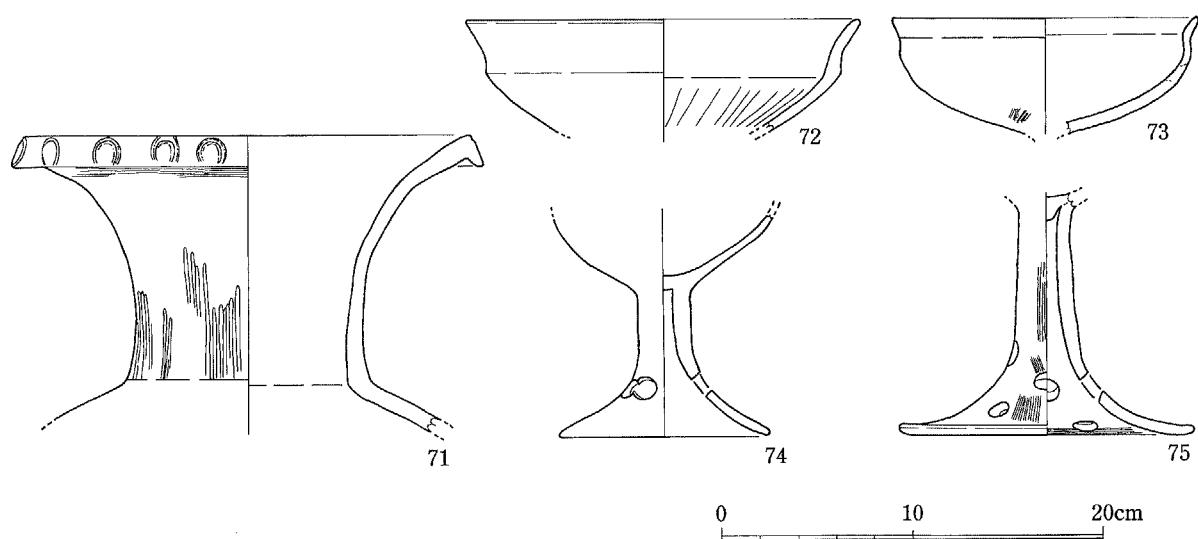


図12 I区 溝5 出土遺物 (1 : 4)

遺物は、調査区北端の最下層から集中して出土した。壺（71）、甕、高坏（72～75）、鉢がある（図12）。壺は広口壺で、体部から口縁部にかけて僅かに外反しながら伸びる。口縁端部には円形竹管紋を施す。摩滅のため、調整は不明である。他の土器と色調が違い、赤褐色系統である。

甕は叩きをもつ体部破片のみである。

高坏は、坏部形態が違い、屈曲して伸びるもの（72）と塊状のもの（73・74）がある。72は、坏部の口縁部が体部に比較して短いことから、時期的には弥生時代後期中頃の時期のものであろう。塊状の坏部には、口縁端部が屈曲するタイプの珍しい形態のもの（73）もある。脚柱部は、棒状の長いものと短いものの両タイプがある。75は、脚柱部と裾部の境界に、上に4個、下に4個交互に孔を穿つ。穿孔された穴は、大きく、1.5cm程度である。

### （3）小結

大規模な溝1は、南部平野を自然地形にそって流れる流路として機能していたことが土層から判明する。時期は、古墳時代初頭である。当該期の集落は、南の微高地、徳蔵地区遺跡、及び更に南の大塚遺跡に存在する。溝1周辺部には、微高地の存在はなく、住居跡も確認できない。溝1の東約50mの地点には、旧河川が存在し、その中に溝1と同規模の蛇行しながら流れる溝を検出している。一段落ちた溝の周辺は、小溝が走り、矢板で区画された小空間が存在する。当該期の水田と想定できる場所である。また溝1の南、約100m地点の調査区からは、当該期の溝を検出している。位置から考えて、溝1の延長線、あるいは分岐した溝と考えられる。溝1の機能は、用排水路の可能性が高い。木製品の存在は、柵を形成する杭などが多いため、部分的に溝の肩部に打ちこまれた可能性がある。

溝1出土遺物には、口縁部を垂下させる広口壺破片はごく少量である。甕は底部径も小さい。また高坏の口縁部や裾部の発達が目立つ。他に二重口縁壺や小型壺の存在がみられる。そのため、溝1及び溝5は、布留式直前段階の庄内期の時期と考えられる。溝5出土遺物は広口壺や高坏の存在からみて弥生時代後期中頃と考えられ、南部地域の特色としては、出土量の多い高坏において、塊形の坏部の口縁端部を外反させる珍しいタイプ（73）がみられる点が挙げられる。

## 第2節 平成13年度の調査（Ⅱ～Ⅳ区）

調査区域は現存する国道424号線から高速道路インターチェンジへの進入路部分である。南北幅約30m・東西延長約160mを測る縦長の範囲だったので、作業効率上、東側からⅡ・Ⅲ・Ⅳ区に分割して、調査を実施した。調査面積は4,341m<sup>2</sup>である。Ⅱ・Ⅲ区は条里地割を踏襲した字下流で、Ⅳ区は字斎藤である。Ⅳ区から国道を挟んだ西側は南部川の旧河道だと推定される。

### （1）層序（図13）

調査区の北側は造成工事により上部が搅乱されていたので、南壁と東西壁の縮尺1/20の土層図を作成した。Ⅱ区の基本土層は上から標高約5.2～5.4mの水田耕作土・床土、旧水田の耕作土・床土の互層が数面、3層の灰色（5Y5/1）粘質土、4a層の黄灰色（2.5Y5/1）粘質土、4b層の褐灰色（10YR5/1）粘質土、5層の灰黃褐色（10YR4/2）粘土、6層の黄灰色（2.5Y4/1）粘土である。Ⅱ区の東部から西部にかけて各土層は漸位的に上がっており、両端で約0.3mの比高差がある。近世～近代と推定される水田層は南東部で顕著に遺存していた。全体的に湿地状の地形を呈し、中世以降に水田化されたと推定される。

Ⅲ区の土層堆積状況はⅡ区とほぼ同様であるが、平均するとさらに0.2mほど高まっている。旧水田耕作土と床土は西部ではみられない。Ⅲ区の南西部は微高地で、オリーブ褐色（2.5Y4/4）弱砂質土の安定した地山となる。

Ⅳ区は上部が整地されて削平されている。南西部は島状の微高地であるが、他は湿地状を呈する。

調査区の地形は全般的に湿地帯であり、南西部にあまり広くない島状の微高地が点在している状況である。南部川の氾濫と堆積作用による微高地の形成は顕著でない。

### （2）遺構（図14～16）

#### 【Ⅱ区】

Ⅱ区では中世の面で、水田畦畔の痕跡を確認した。幅約50cm前後で、主軸は真北からN-30°-Eで、現状の水田区画とほぼ平行する。水田1筆の面積は不明であるが、南北幅約24mや東西幅約34.5mの区画がみられる。この面では人や牛などの歩行した足跡を検出した。また、北から南へ流れる幅約7～9m・深さ約1.0～1.2mの自然流路を検出した。突堤紋をもつ深鉢の破片が少量出土した。

#### 【Ⅲ区】

Ⅲ区では、中世の面で、幅約0.3～0.8m・深さ約0.1mの浅い溝を数条検出した。現状の水田区画とほぼ平行する。その下の面では、不定形な浅い土坑と北西から南東に流れる幅約2.0m・深さ約0.5mの溝と同方向に延びる浅い溝数条を検出した。平安時代の土師器が少量出土した。その下の面では弥生時代から縄紋時代晩期にかけての不定形な浅い土坑とピットを検出した。

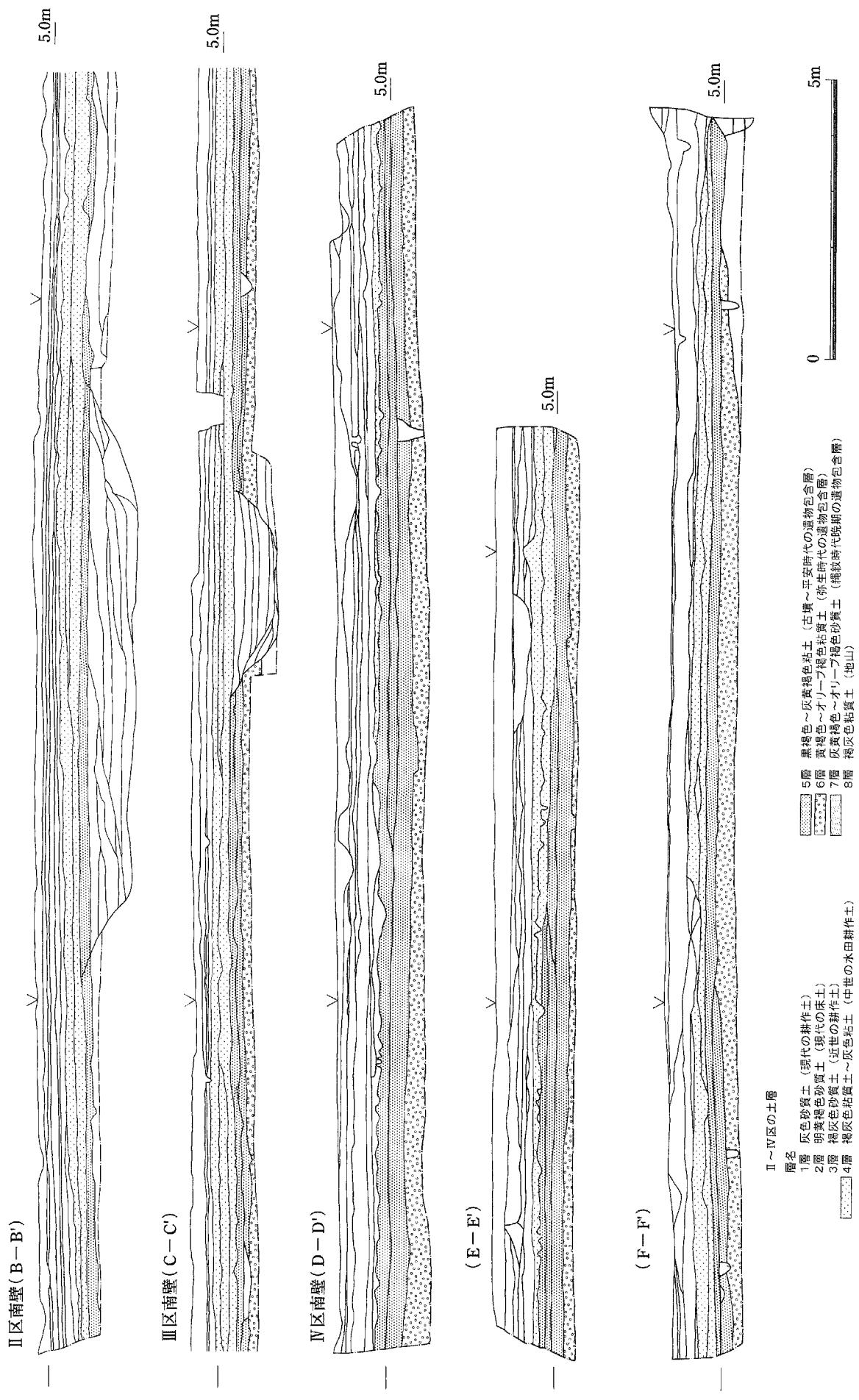


図13 II～IV区 土層断面図 (1 : 100)

## 【IV区】

IV区の南西部には西から東に砂礫層の高まりが舌状に延び、その周辺から南部にかけて微高地となっている。その北側から東側にかけては低湿地である。古墳時代から古代の面では、不定形な浅い土坑を検出した。弥生時代の面では西部を中心として、溝・ピット・土坑を検出した。縄紋時代晩期の面では、南部を中心として、ピット・土坑を検出した。

### (3) 遺物 (図17)

出土遺物を時代別にまとめると、縄紋時代は晩期の口縁部と肩部に刻み目突帯をもつ深鉢と石器（スクレイパー）、弥生時代は前期及び後期の甕や高壙、古墳時代は後期の須恵器壙・器台、古代は土師器皿・黒色土器壙・平瓦、中世は土師器皿・瓦器皿・山茶壙・備前擂鉢・東播系擂鉢・常滑壺・瀬戸美濃青皿・青磁・白磁・土錘、近世は備前擂鉢・伊万里碗などである。

76～78はスクレイパー（削器）である。76はサヌカイト製で、長さ12.0cm・幅5.0cm・厚さ1.4cmの横長剥片の長辺に刃部をもつサイドスクレイパーである。刃部は凸刃状をなし、両面から調整が施されている。表面は風化が著しく、淡灰白色を呈する。77もサヌカイト製で、長さ6.1cm・幅2.9cm・厚さ0.6cmの横長剥片の長辺に刃部をもつサイドスクレイパーである。背面には自然面が残り、刃部は凸刃状をなし、両面から調整が施されている。表面は風化が著しく、淡灰白色を呈する。78もサヌカイト製で、長さ5.6cm・幅3.6cm・厚さ0.6cmの剥片の長辺に刃部をもつサイドスクレイパーである。背面には自然面が残り、刃部はやや凸刃状をなし、片面から調整が施されている。79は縄紋土器の深鉢である。口縁外面端部と肩部に浅いD字状の連続する刻目を施した突帯が巡る。胎土には5mm以下の砂粒を多く含み、焼成堅緻である。80は須恵器壙身である。口径は12.6cmで、たちあがりはやや長く上方にのび、端部は丸い。受部はやや太く上外方にのびる。陶邑編年のⅡ形式2段階に相当するものと考えられる。<sup>註12</sup>81は山茶碗の底部である。南部系とよばれる荒い胎土の土器で、退化した低い高台が貼り付けられている。82は口径8.0cmの瓦器小皿である。83～87は東播系須恵質の捏鉢である。88・89は備前の擂鉢である。90は中国製の短頸壺で、耳の貼付け痕がみとめられ四耳壺か三耳壺だと考えられる。体部上部に3条の沈線が巡る。91は瀬戸美濃の灰釉皿である。外底部には正格子の卸目が施されている。92は中国製白磁皿である。内面には花文が彫られ、底部は回転糸切で、露胎である。93は中国龍泉窯製の青磁碗である。高く直立する高台をもち、底部は露胎である。94も中国龍泉窯製青磁碗で、体部は外反し、高台疊付は露胎である。95・96は管状の土錘である。

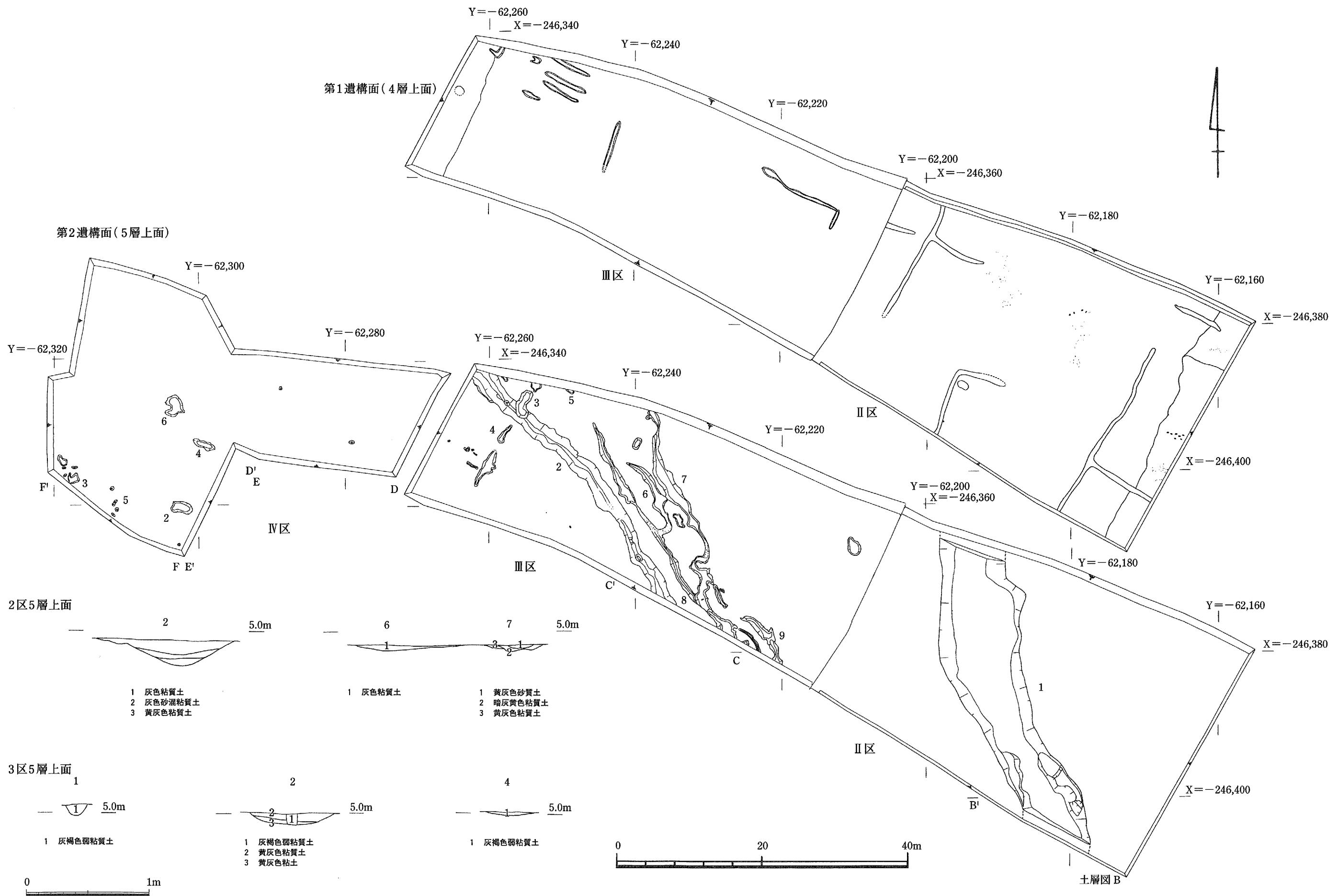


図14 II～IV区 第1・2遺構面 (1:500)

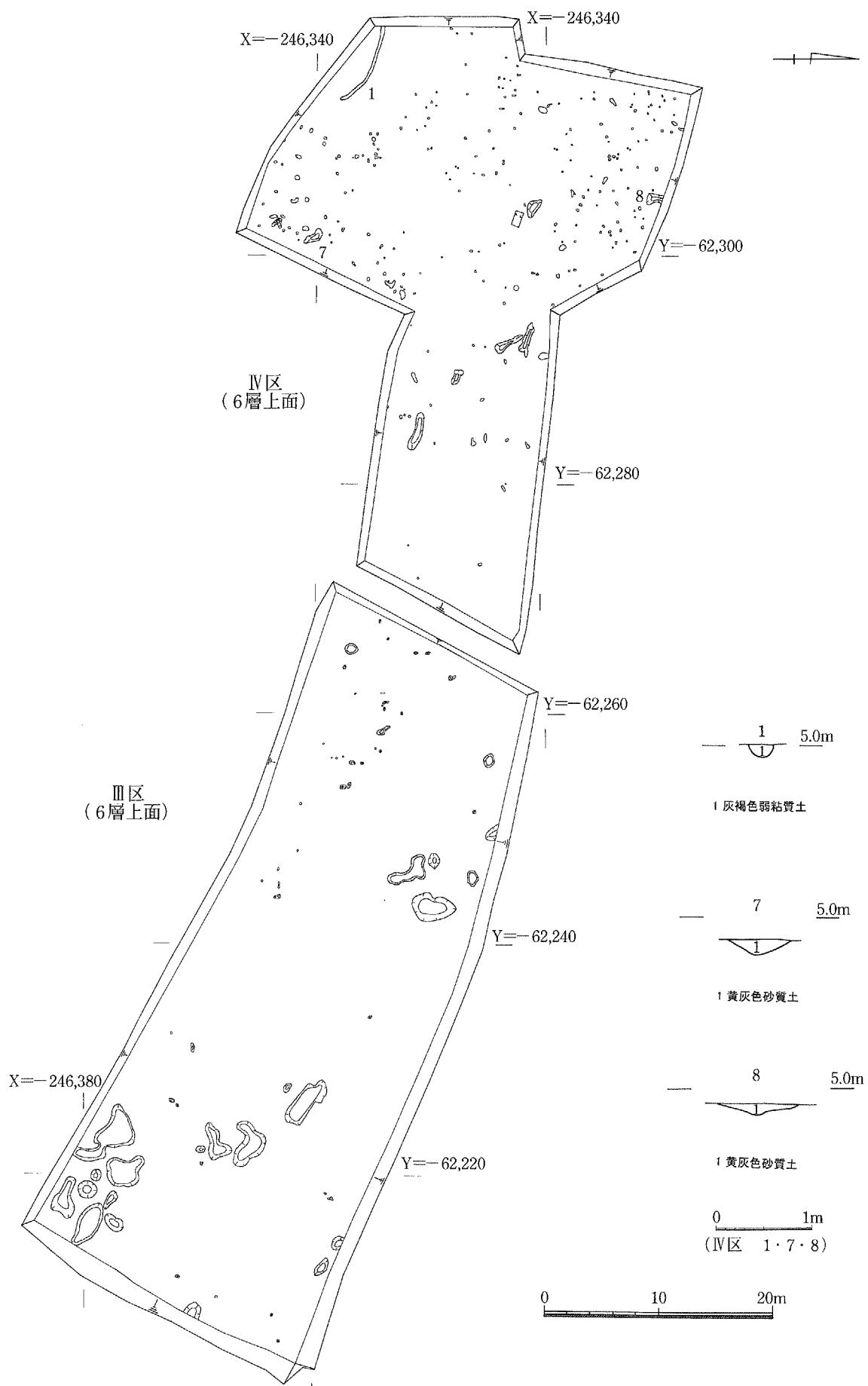


図15 III・IV区 第3遺構面 (1:250)

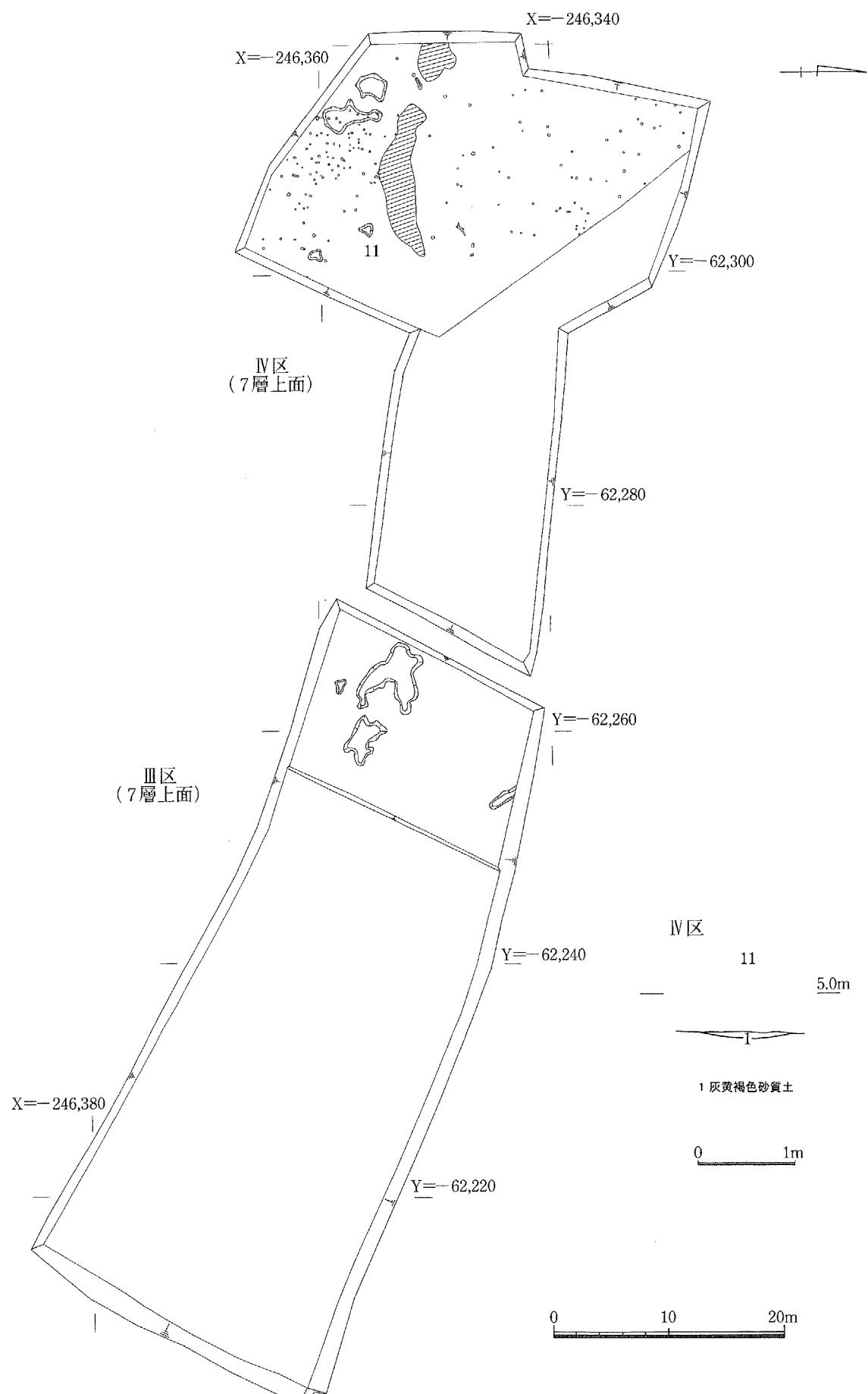


図16 III・IV区 第4遺構面 (1:250)

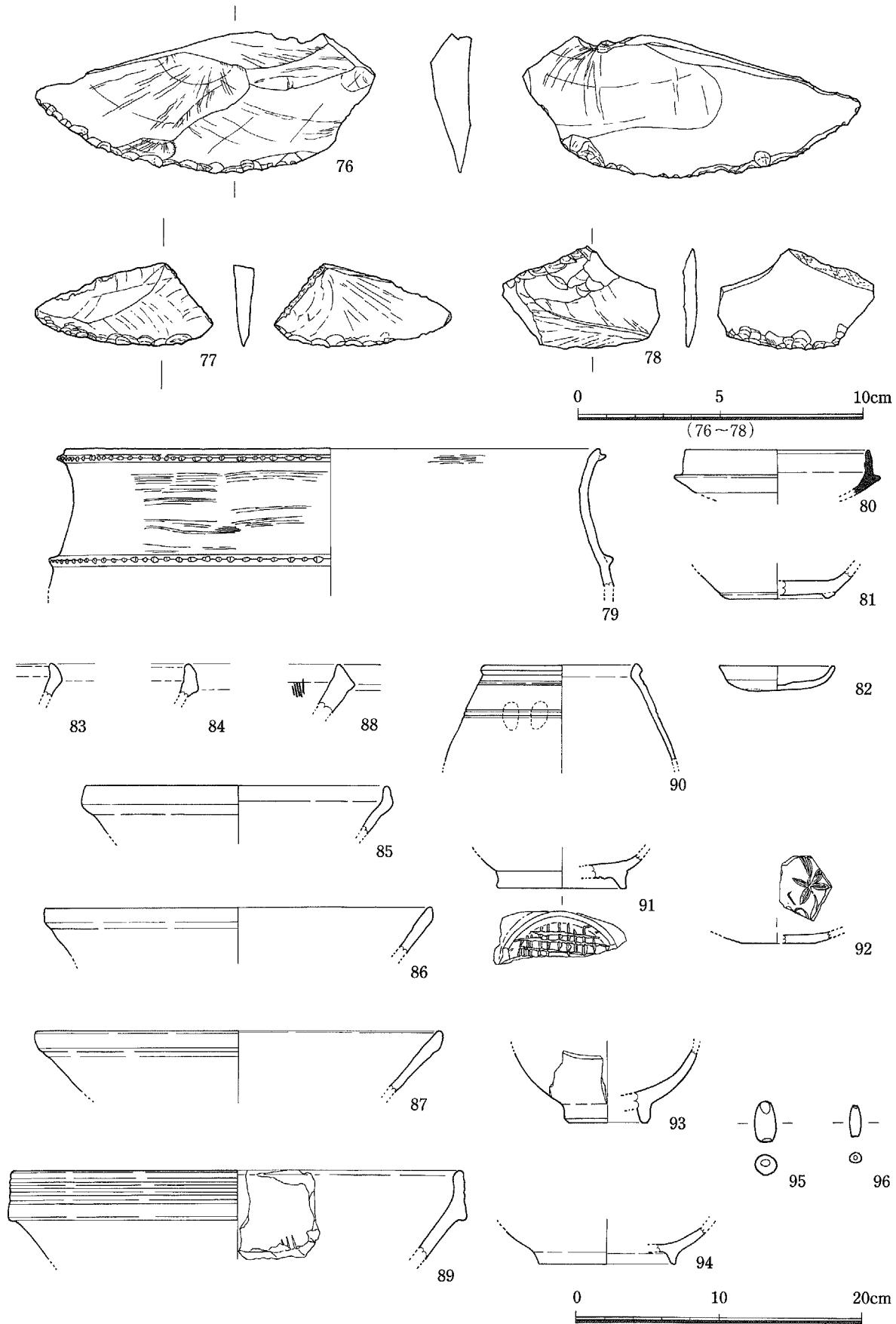


図17 II～IV区 出土遺物 (1:4)

### 第3節 平成14年度の調査（V・VI区）

平成14年度は、V区とVI区の二つの調査区について発掘調査を実施した。調査区は南部川村徳藏字斎藤に所在し、調査面積は544m<sup>2</sup>である。

V区はIV区のすぐ南に設定した調査区で、田中神社から約130m南にあたる。西辺約20m、南辺約11mの台形に近い形状の調査区で、面積は192m<sup>2</sup>である。地形は南西に降る緩傾斜地である。

VI区はV区の約50m南に設定した調査区である。東西約11m、南北約38mの調査区で、面積は352m<sup>2</sup>である。調査区は、用水路により東西に分断されている。

なお、調査時はV区をA区、VI区をB区と呼称しており、当センターの年報等ではこの調査時の地区名で報告しているが、当報告書の調査区名を以って正式な調査区名とする。

#### 概要

V区・IV区で確認された最も古い遺構は縄紋時代晚期のものである。V区ではそれ以降の各時代の遺物包含層が堆積しているが、各層の上面に良好な遺構面は残存していない。一方、VI区では南側に安定した微高地があり、古墳時代後期の良好な遺構面が検出された。その後は、古代には湿地、中世には水田、近世には水田及び畑となっており、出土遺物は微量である。

周辺の試掘・確認・立会調査から本発掘調査までの一連の調査により、V・VI区周辺には縄紋時代晚期の微高地が存在したが、弥生時代中期頃の流路の移動により少なくとも3つの島状微高地に分断されたことを確認した。<sup>註13</sup>

#### (1) 層序(図18)

基本的にはI～IV区と同様の堆積傾向を示すが、比較的安定した微高地に立地する。土色と土質は図18のとおり、各層の内容は下記のとおりである。

1層は現代の耕作土、2層は床土。VI区では畑作（あるいは水田の裏作）用の畝跡群が検出された。

3層は近世の耕作土。鉄・マンガン粒を含む砂質土である。1層との比較から、水田ではなく、畑作を行っていたものと推定される。陶磁器が出土した。

4層は中世の水田耕作土。鉄・マンガンの粒を多く含み、砂の比率の低い粘質土である。土師器・瓦器の破片が出土した。

5層は古墳時代から平安時代までの堆積土。均質な灰色の粘質土であり、湿地状を呈していたものと推定される。須恵器が出土した。

6層は弥生時代～古墳時代までの堆積土。弥生土器・土師器と見られる破片が出土した。

7層は縄紋時代晚期の堆積土。突帯紋土器の破片のみが一定量出土した。

8層は縄紋時代晚期以前の堆積土。V区では遺物は出土しなかったが、VI区では側溝にて、8層上面に近い位置から、土器片が1点出土している。

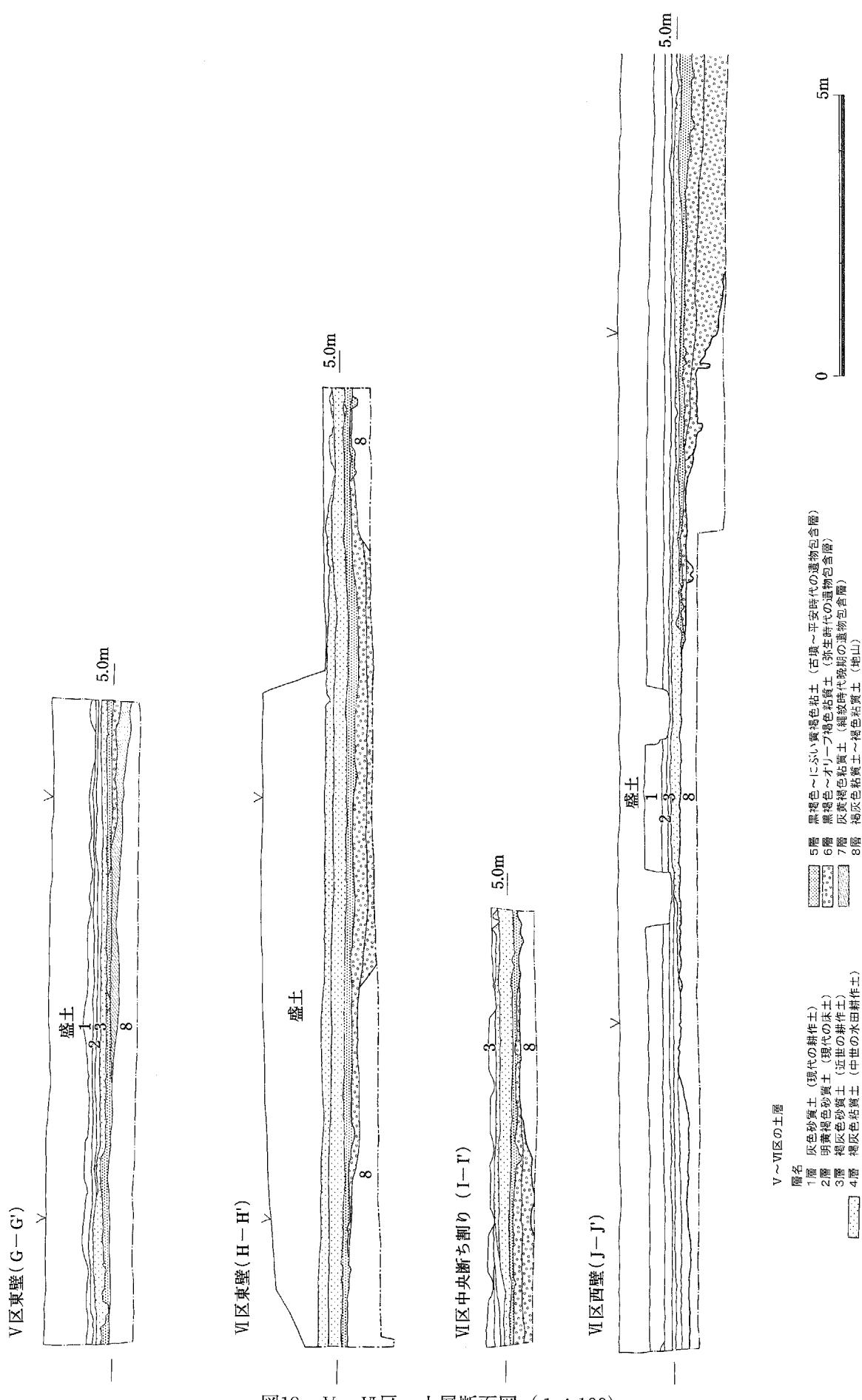


図18 V・VI区 土層断面図 (1:100)

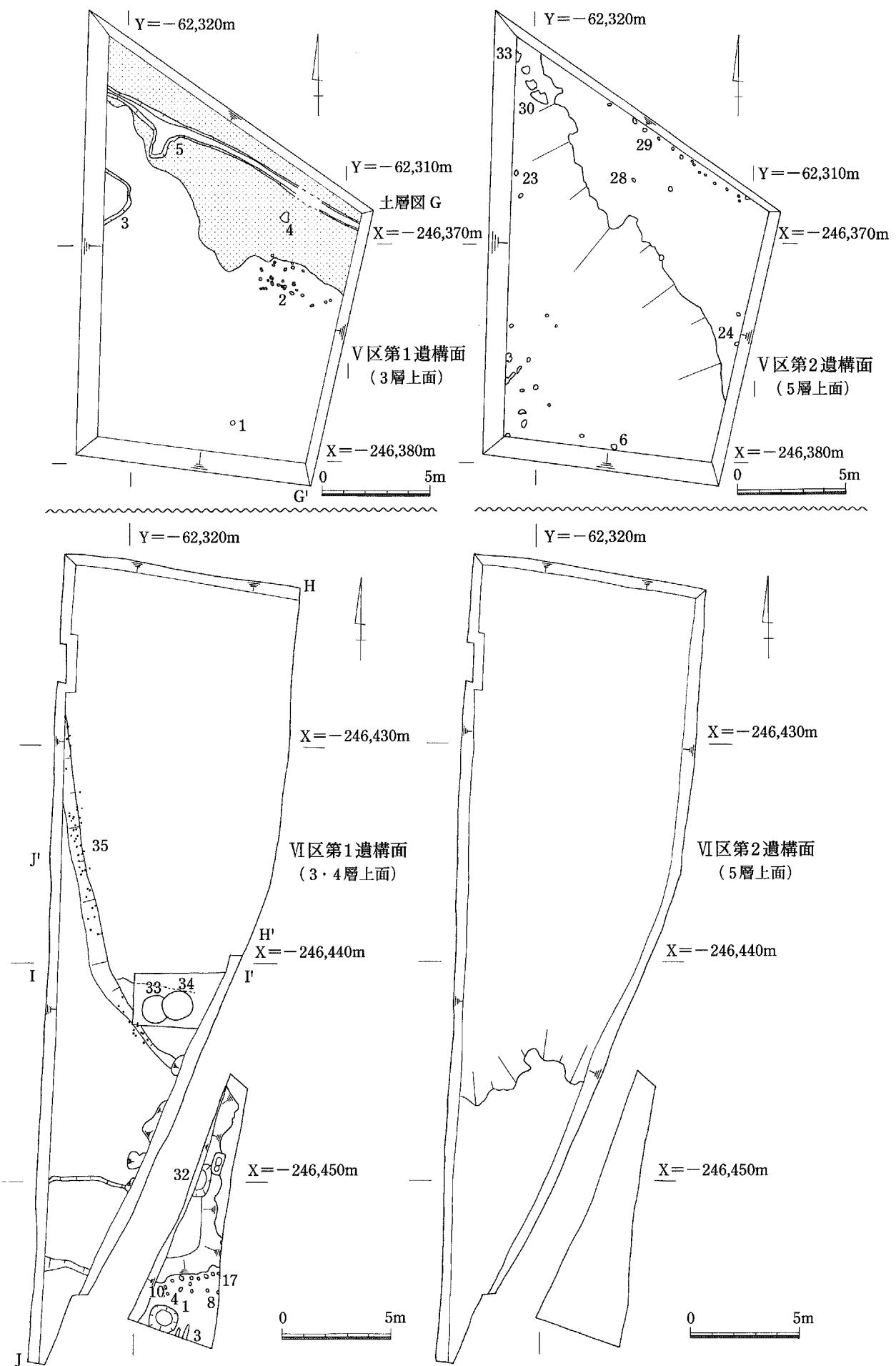


図19 V・VI区 第1・2遺構面 (1 : 250)

## (2) 遺構

遺構名は調査区ごとに設定した。V区では遺構1～85、VI区では遺構1～146を検出した。このうち、遺構の性格の判断がつくものについては、遺構1→土坑1のように表記し直した。

<第1遺構面（4層上面）—中世・近世—>（図19左）

### 【V区】

4層（中世水田耕作土）をベースとしているので平坦な遺構面であるが、地盤の土色が南北で異なっている。調査区南半は鉄・マンガンの粒が酸化しており土色が全体的に褐色がかっているが、北半（図19のスクリーントーン部分）は鉄・マンガンの粒があるものの酸化しておらず、土色は灰色を呈する。これらの状況から、湿地状の堆積は残存しないが、中世以降に調査区北半は湿地となっていたものと推定される。

足跡1 牛の足跡である。湿地との位置関係から、水を飲みに来たものと考えられる。

溝5 湿地の形成原因とも考えられる溝である。東→南約28度の方位へ、約1度の角度で流れている。途中に水溜め状の窪みがあり、周囲を板で土留めしている。

### 【VI区】

4層上面と3層（近世堆積土）上面に形成された遺構面であるが、図では第1遺構面としてまとめた。中世の水田面に対して、南西方向に3段階の近世の落ち込みがある。

土坑1 近世の土坑である。4段階の水性堆積で埋まっている。

ピット4～17 2列に並んだピット列である。ピットは浅く、底は平坦である。

土坑33 土坑34と同規模・同形状の土坑である。土坑34の1段階古い据付痕と考えられる。

土坑34 径約1.4mの土坑の周囲を漆喰で固めている。漆喰に類するものと砂利を混ぜて固めたものと推定され、凝灰岩に近い風合いを呈する。磁器片と木製の棒が出土した。土坑33・34の周囲には小さな穴が確認されている。遺構の性格は判然としないが、VI区付近は近世に鋳物師が住んでいたと推定される場所であり、鋳造関連の遺構である可能性が考えられる。

杭列35 4層上面及び4層掘削中に検出した乱杭列である。

<第2遺構面（5層上面）—中世水田開発以前—>（図19右）

### 【V区】

5層（古墳時代～平安時代の湿地堆積土）上面の遺構面で、南西へ降る傾斜地である。

杭列29 4層掘削中に検出した杭列であり、中世の水田畦畔に伴うものと考えられる。東→南約35度の方位に並んでおり、区画の方位は第1遺構面の溝5を経て、ほぼ現在まで踏襲されている。

杭（107）は57cm残存しており、釘が3本（104～107）打ち込まれた杭も出土した。

### 【VI区】

調査区北側から中央まで、湿地化している状況を確認した。

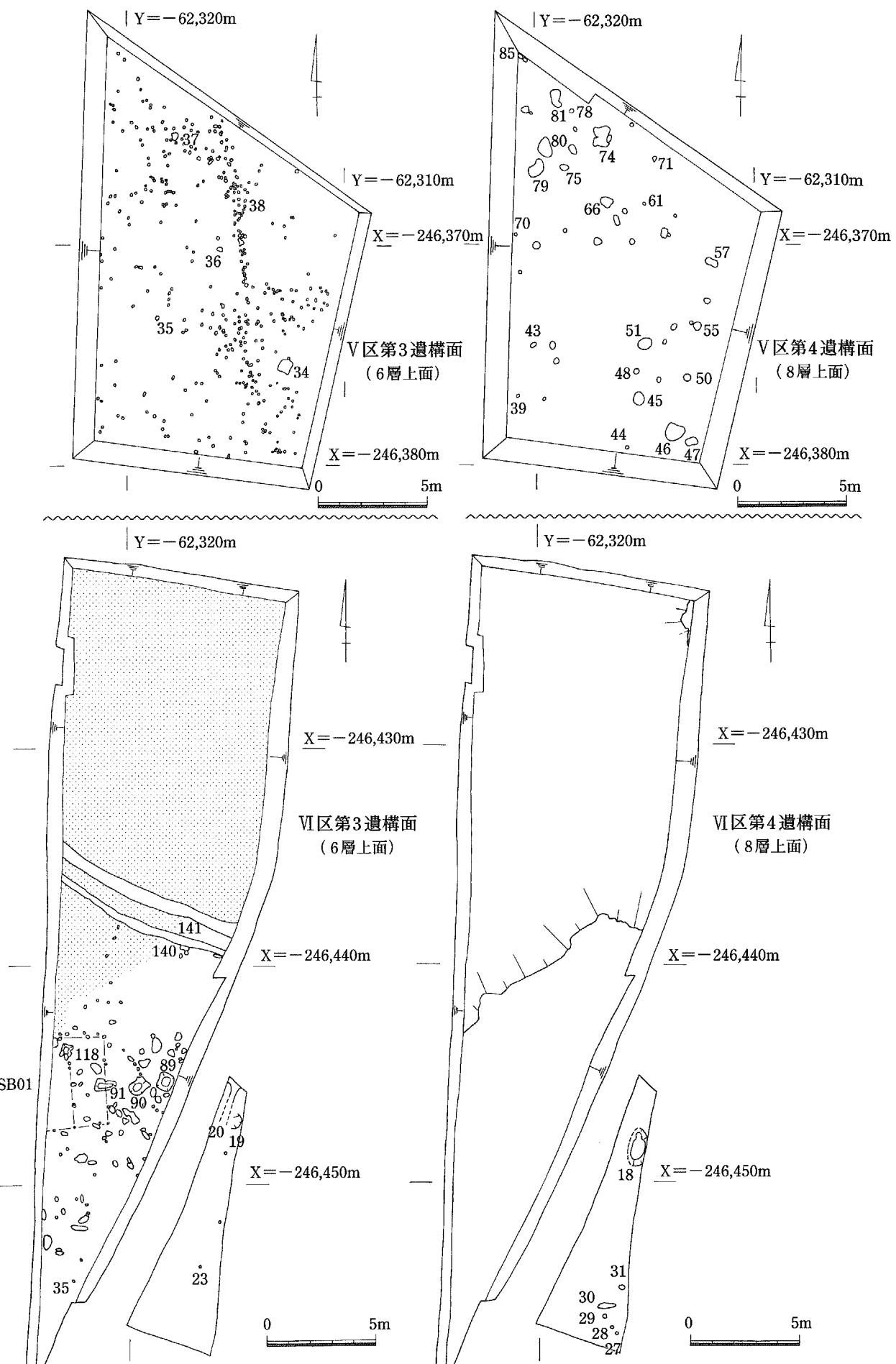


図20 V・VI区 第3・4遺構面 (1:250)

### <第3遺構面（6層上面）—弥生時代～古墳時代後期>（図20左）

#### 【V区】

南西へ緩やかに降る傾斜地で、4基の土坑・ピットのほか、約360基の小型ピット状遺構（ピット群38として一括して扱う）を検出した。

ピット群38 径4cmのピット群。断面は深さ20cm以下の円筒形、埋土に第4層と第5層に類似する土が入る。

#### 【VI区】

調査区南側が微高地上を呈しており、掘立柱建物跡等がつくられている。調査区北側の自然流路跡は埋まっているが、水はけが悪かったものと思われ、溝140・141より北側には遺構がみられない。

土坑89・90 土坑89は上面で一辺約90cm、中段で一辺約50cmの隅丸方形の土坑で、深さは55cm。土坑内は2層に分かれ、下層には径約8mmの植物を燃やした炭が残り、上層には底部を抜いた土師器甕を据えている。土坑90も同様の土坑であり、土器片が出土している。

溝140・141 島状微高地の縁辺にある直線的な溝である。この溝を挟んで遺構の有無が分かることから、排水を兼ねた区画溝の性格をもつものと判断される。

掘立柱建物跡S B01 4間×3間以上の掘立柱建物跡である。柱穴は径約15cmで、掘方はない。南北1間は約100cm、東西1間は変則的で約70～90cm。方位は座標北から3.5度西に振れる。土坑89と同様の埋土で埋まるので、古墳時代後期頃の建物と考えている。

### <第4遺構面（9層上面）—縄紋時代晩期—>（図20右）

#### 【V区】

南西へ緩やかに降る傾斜地で、40基の土坑・ピットを検出した。

土坑46 径75cm、深さ13cm、灰黄褐色粘質土で埋まる。

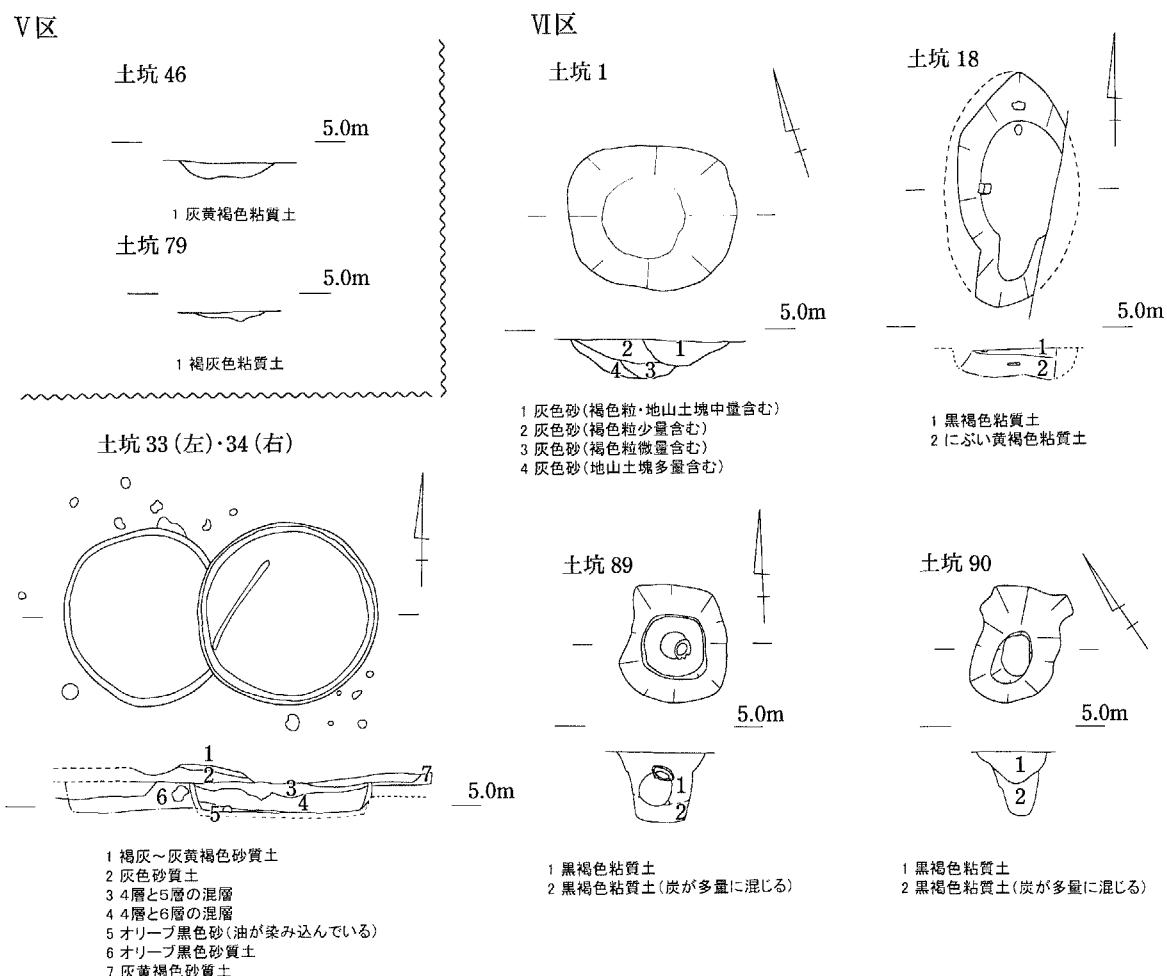
土坑79 径60cm、深さ8cm、褐灰色粘質土で埋まる。土坑46～55、土坑79～81は径5～6mの弧状を描いて分布しており、埋土に炭化物が混入していることから、竪穴住居跡の下端部である可能性を考えたが、竪穴住居とする積極的な状況証拠は得られなかった。

#### 【VI区】

調査区南側には微高地状の地形が残存している。また、調査区北東端では別の微高地の縁辺部を確認した。この2つの島状微高地は従来一つの微高地であった可能性があるが、調査区の中央から北側に弥生時代のものとみられる自然流路があり分断されている。

土坑18 長さ180cm、幅推定100～120cm、残存する深さ25cmの土坑である。

ピット31 7層と類似する土で埋まるピットであり、突帯紋土器片が出土した。V区の土坑79等同様、弧状を描くピット列となっている。



掘立柱建物跡 SB01

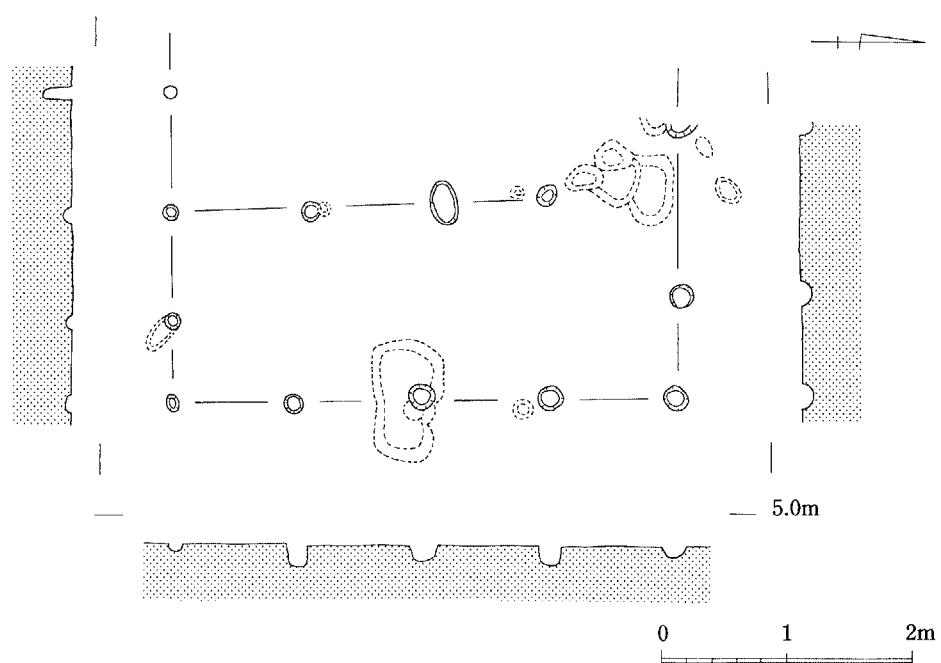


図21 V・VI区 遺構面 (1 : 60)

### (3) 遺物 (図22)

V区・VI区ともにコンテナ2箱分ずつの遺物が出土した。出土遺物の内訳はV区が縄紋土器213点、土師器12点、サスカイト片1点、鉄釘3点であり、VI区が縄紋土器19点、土師器60点、須恵器9点、陶器13点、磁器7点、土錘3点である。なお、微細な土師質の破片は土師器とし、一括の遺物は1つとして数えている。中世水田畦畔に伴う杭を計3本、サンプルとして採取した。

97・98は土器底部。伴出する土器片から、縄紋時代晩期の突帯紋土器深鉢の底部と考えている。底径は97が8.1cm、98が5.5cm。それぞれVI区土坑91と、V区土坑61から出土した。

99は須恵器坏身。口径9.9cm、残存高3.6cmで、立ち上がりは短く、内傾する。VI区5層から出土した。

100は土師器甕。口径14.9cmで、胴が長く、外面は刷毛目調整を施す。上部は完全に残っているが、底部は欠失しており、破片も伴出していない。VI区土坑89から出土した。

101～103は管状土錘。長さ3.3～4.4cm、最大径0.9～1.3cm。VI区の3・4層から出土した。

104～106は鉄釘。断面は四角形で、頭部を折り曲げる。V区杭列29の杭に打ち込まれた状態で出土した。

107は杭。V区杭列29（中世水田畦畔に伴う杭列）の杭のうち残存状態の良いサンプルを実測した。下端を尖らせ、上端付近には一方から鉈のようなもので叩いた傷が5・6箇所みられる。

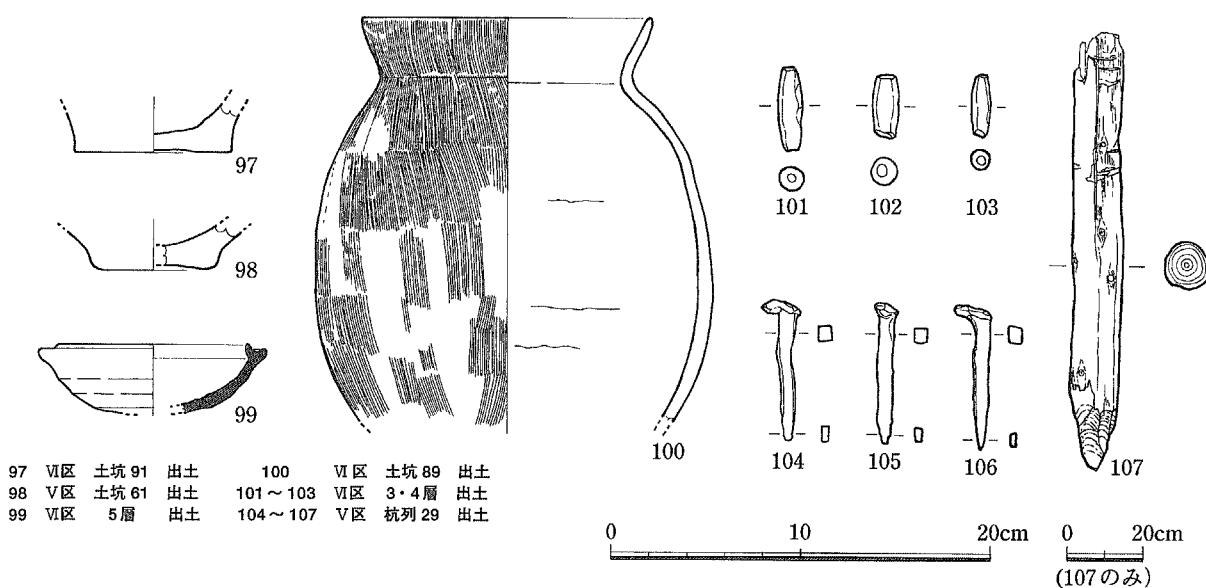


図22 V・VI区 出土遺物 (1 : 4)

## 第3章 まとめ

南部平野では、ここ数年来、近畿自動車道南部インターチェンジ建設工事及び、国道424号改築工事、県道上富田南部線道路改良工事、古川高速関連改修工事、大規模圃場整備などの事業が集中して実施され、それに伴う発掘調査面積は延べ72,000m<sup>2</sup>を超える。本県ではかつて例の無い大規模な調査が行われてきた。縄紋時代から古墳時代に至る集落跡や弥生時代初頭の堰、室町時代後期の高田土居城跡など新たな考古学的な発見が相次ぎ、南部平野の歴史の解明が進みつつある。

今回の発掘調査地点は徳蔵地区遺跡の北西部で、遺跡の中心からややはざれた縁辺部である。大部分が湿地状の地形を呈し、自然流路や溝が北西部から南東方向に流れ、中世以降は水田化されている。湿地の中に部分的に狭小な島状の微高地があり、比較的安定した褐色土が堆積している。縄紋時代晚期から古墳時代にかけての遺構が営まれている。

平成10年度に調査した大溝の庄内式土器併行期の堆積土から多数の建築部材と有頭棒および、県内で初めて鳥形木製品が出土した。鳥形木製品は弥生時代の初めに稻作技術とともに日本に伝来し、穀靈を運ぶシンボル、或いは害虫を駆除する益鳥として考えられ、農耕儀礼に使われたものだと推定されている。南部平野周辺の晚稻や西本庄の丘陵地帯では、新しい型式の突線紐式の大型銅鐸などが6例みつかっている。今回発見された鳥形木製品は底部に2ヶ所穿孔が見られるため、棒の先にくくりつけて鳥竿として、集落からやや離れた水田部の水辺で、有頭棒や銅鐸などと共に農耕儀礼に使用された可能性がある。県内から出土した弥生時代から古墳時代前期にかけての鳥形土製品は5遺跡8例有り<sup>註14</sup>、海南市の亀川水系に位置する弥生時代の大規模集落である岡村遺跡では銅鐸形土製品と鳥形土製品が弥生時代中期後半の溝から出土している。時期的には異なるが、今回の検出例は県内の弥生時代の農耕儀礼を考える上で、貴重な一例だと言えよう。

### 註

- 1 川崎雅史『大塚遺跡—マンション建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』御坊市文化財調査会2002
- 2 I区は渋谷高秀「徳蔵地区遺跡」『(財)和歌山県文化財センター年報1998』和歌山県文化財センター1999、II・III・IV区は黒石哲夫「国道424号道路改築工事に伴う徳蔵地区遺跡発掘調査」『同2001』、V・VI区は丹野拓「国道424号道路改良工事に伴う徳蔵地区遺跡の平成14年度調査」『同2002』に概要を報告した。
- 3 川崎雅史『大塚遺跡—町道芝東吉田線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』御坊市文化財調査会編、南部町教育委員会発行2002
- 4 永光寛『片山遺跡A地点発掘調査概報』南部町教育委員会・片山遺跡調査委員会1978等で確認している。片山遺跡では、このほかに和歌山県教育委員会によりB・C・D・G地点の調査概報が刊行されている。
- 5 村田弘「大塚遺跡現地説明会資料」和歌山県文化財センター2002
- 6 丹野拓「南部莊園関連遺跡の第2次発掘調査」『(財)和歌山県文化財センター年報2002』和歌山県文化財センター2002で概要が報告されており、本年度報告書が刊行される見込である。

- 7 畑三郎・山本賢・小賀直樹・益田雅司『大日津泊り遺跡発掘調査概報』南部町教育委員会2003
- 8 海津一朗ほか『中世再現1240年の莊園景観—南部莊に生きた人々—』和歌山県中世莊園調査会2002
- 9 川崎雅史『平須賀城跡発掘調査報告書』南部川村教育委員会1996、佐伯和也『高田土居城跡発掘調査』2003。高田土居城跡中心部については、和歌山県文化財センター年報で概要が報告されており、近年報告書が刊行される見込である。
- 10 和歌山県文化財センターの調査により、県道上富田南部線に沿って旧大年・梅田・大塚遺跡の範囲で鋳造関連の遺構を確認している。
- 11 「埋蔵文化財包蔵地の範囲変更」『和歌山県埋蔵文化財調査年報—平成13年度—』和歌山県教育委員会2003
- 12 中村浩『陶邑Ⅱ』大阪府教育委員会1977
- 13 主な調査成果は次のとおり。V区とVI区の間の試掘坑は流路の中にあたり、弥生時代中期の土器片が検出されている（武内雅人「32.徳蔵地区遺跡・高田土居城跡③00-101」『和歌山県埋蔵文化財調査年報—平成13年度—』和歌山県教育委員会2003）。VI区北東部に僅かに確認された微高地の約30m北に、村道新設に伴う試掘坑をあけている。安定した微高地が確認され、縄紋土器片とサヌカイト片が出上している（丹野拓「32.徳蔵地区遺跡・高田土居城跡①01-173」『和歌山県埋蔵文化財調査年報—平成13年度—』和歌山県教育委員会2003）。VI区と現在の国道424号線を挟んで西側にあたる位置における立会調査では、微高地は検出されず、流路の中であった（「32.徳蔵地区遺跡・高田上居城跡④97-327」『和歌山県埋蔵文化財調査年報—平成13年度—』和歌山県教育委員会2003の地点。立会調査の担当・富加見泰彦氏の教示による。）
- 14 河内一浩「埴輪祭祀の前夜－紀伊における鳥形土製品の系譜と位置付け－」『紀伊考古学研究第5号』2002



遺跡遠景①（東から）



遺跡遠景②（西から）



遺跡遠景③（北から）



I区 全景（南から）



I 区  
溝 1 全景  
(東から)



I 区  
溝 1  
(南西から)



I 区  
溝 1 土層断面  
(北から)



I区  
溝1 木製品出土状況  
(東から)



I区  
溝1 同近景  
(西から)



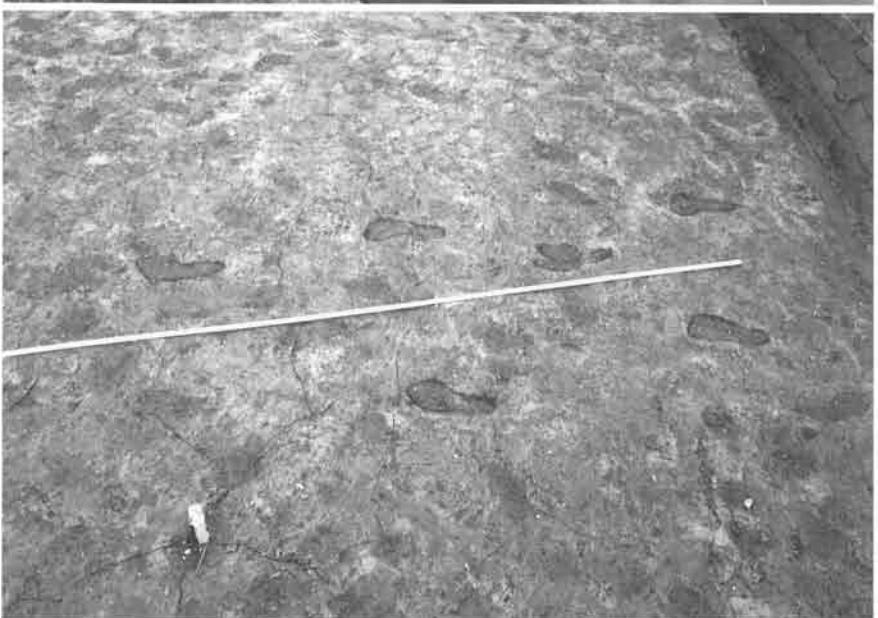
I区  
溝1・2・5  
(南から)



II区  
4層上面 検出遺構  
(北西から)



II区  
5層上面 検出遺構  
(南から)



II区  
4層上面 人の歩行跡



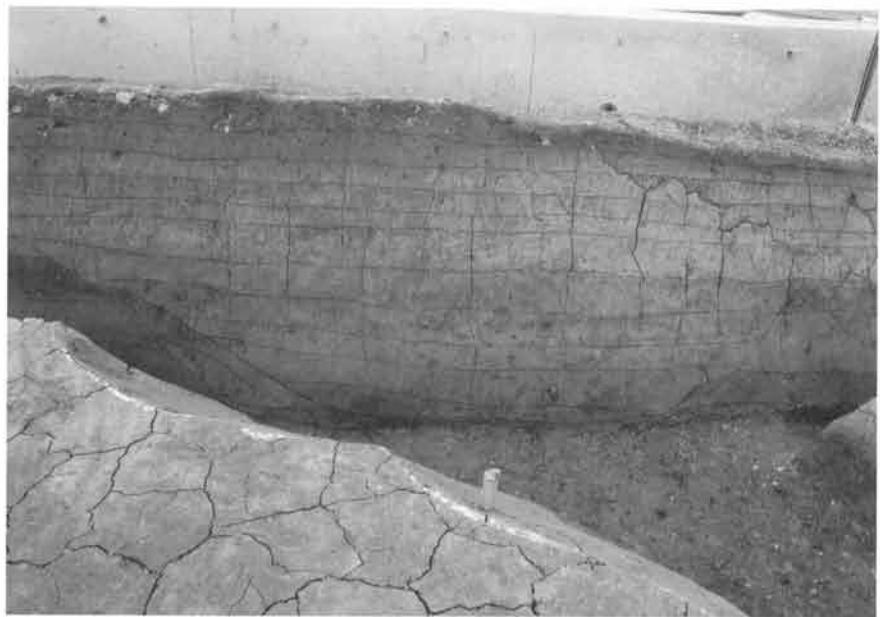
III区  
4層上面 検出遺構  
(西北西から)



III区  
5層上面 検出遺構  
(西北西から)



III区北西部  
7層上面 検出遺構  
(西北西から)



III区  
南壁中央部  
土層堆積状況



IV区  
6層上面 検出遺構  
(北から)



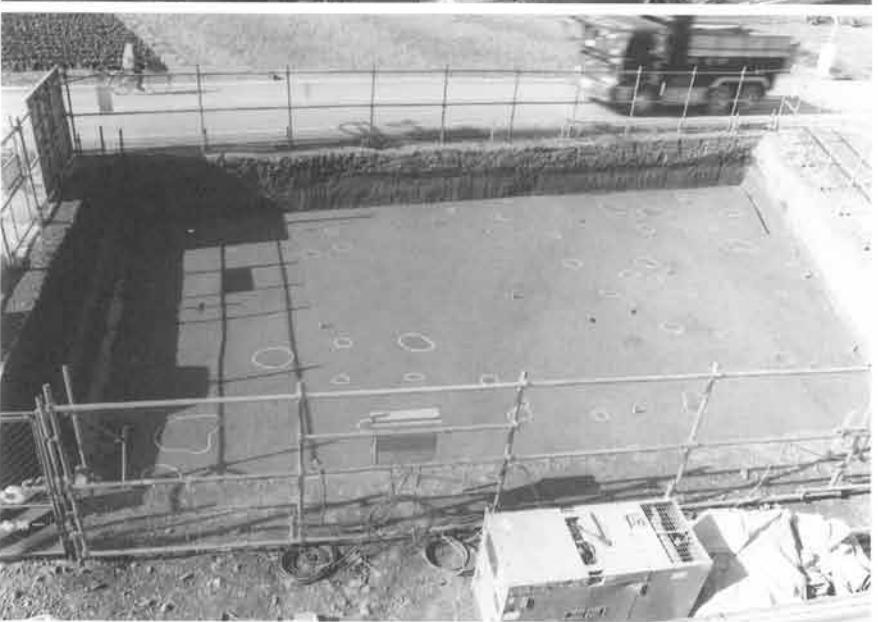
IV区  
6層上面 土坑・ビット  
(南から)



V区  
第1遺構面  
(東から)



V区  
第3遺構面  
(東から)



V区  
第4遺構面  
(東から)



VI区  
全景  
(北から)

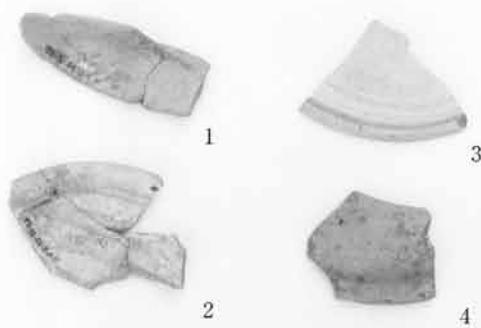


VI区  
微高地上的遺構狀況  
(北東から)



VI区  
南西部近景  
(北から)





14



8



9



15

1 ~ 6 包含層出土土器、7 ~ 15 I区 溝1出土土器①



16



19



21



17



22



18



23



20



24



25



30



26



31



27



28



32



29



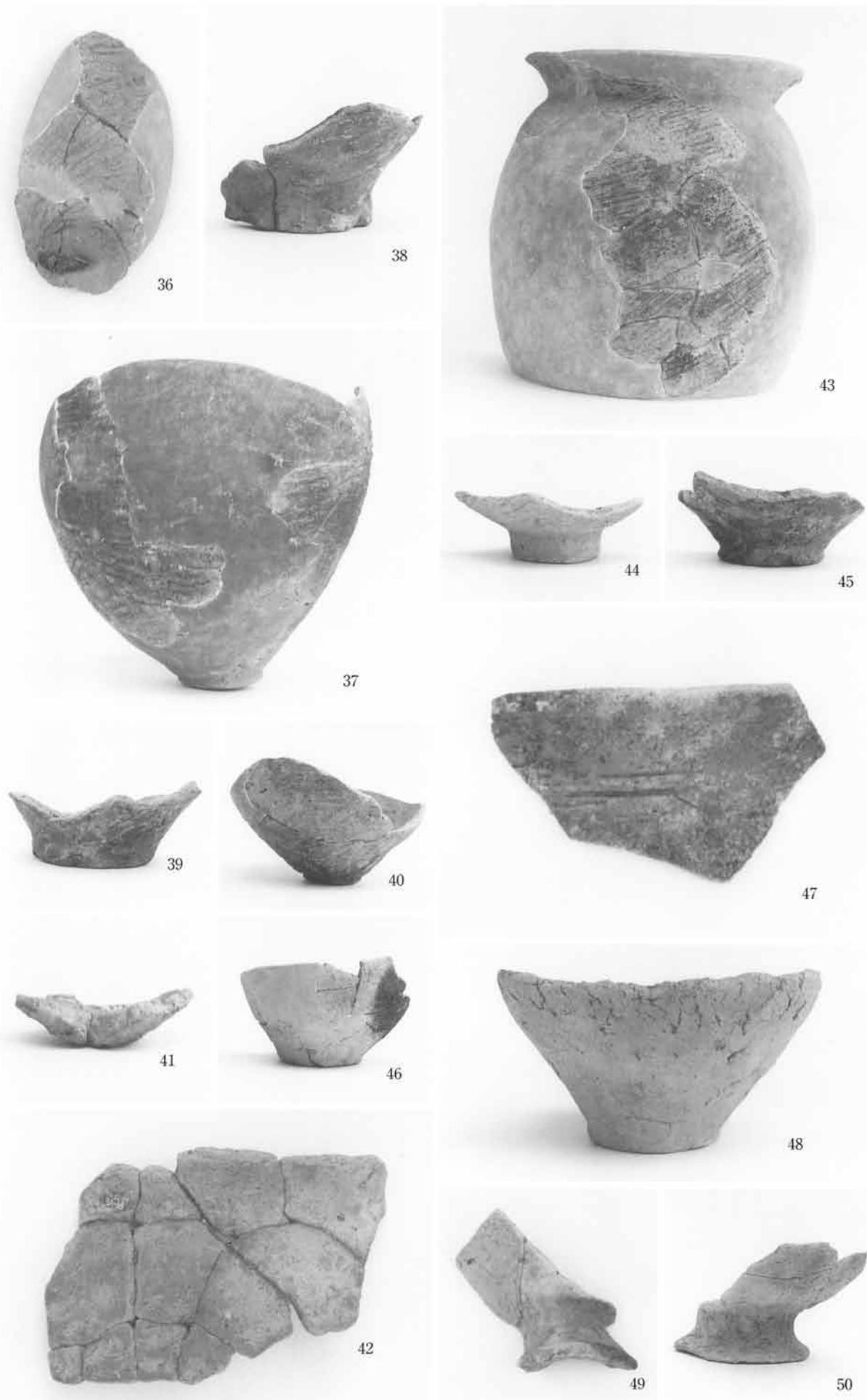
34



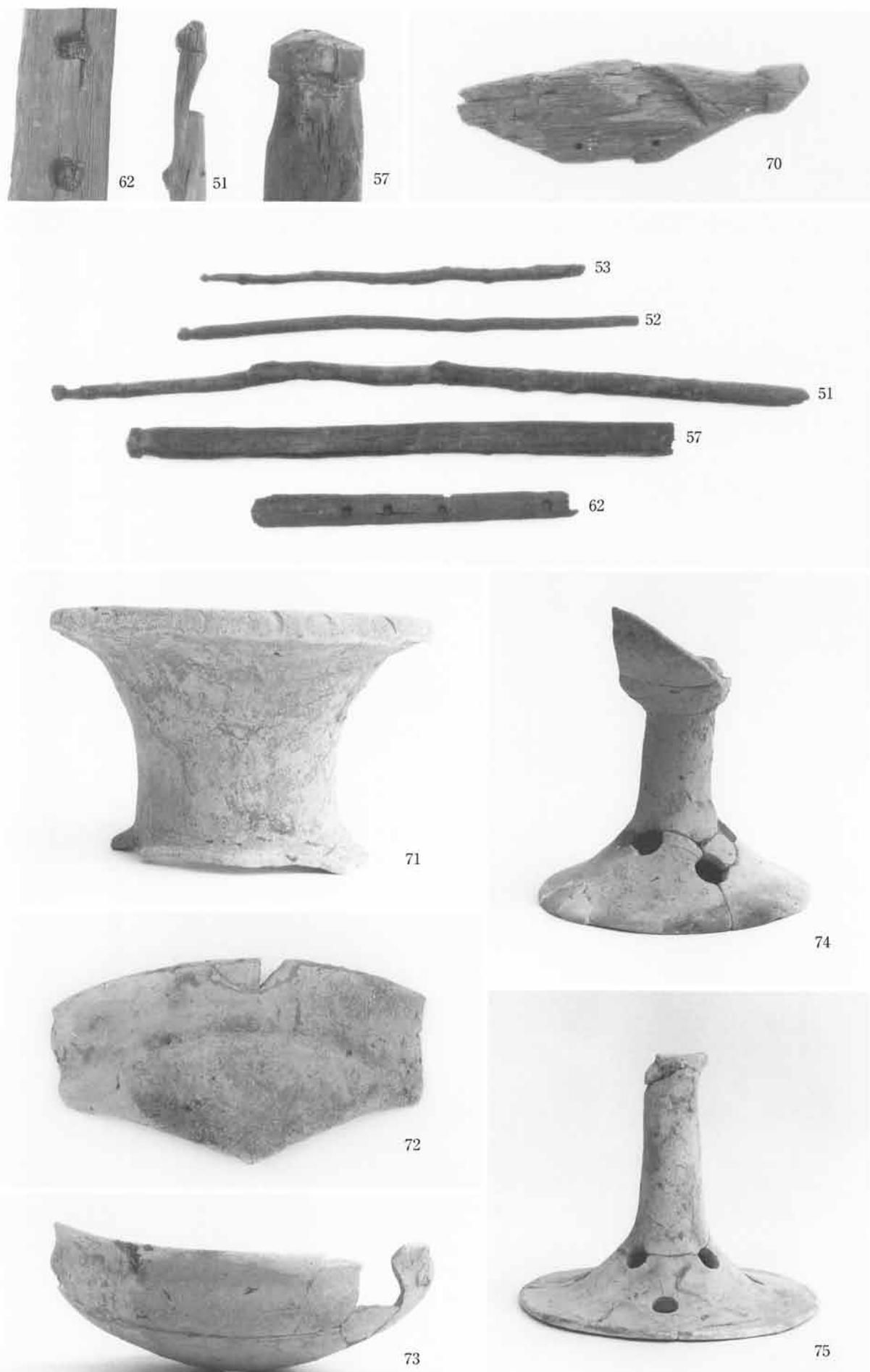
33



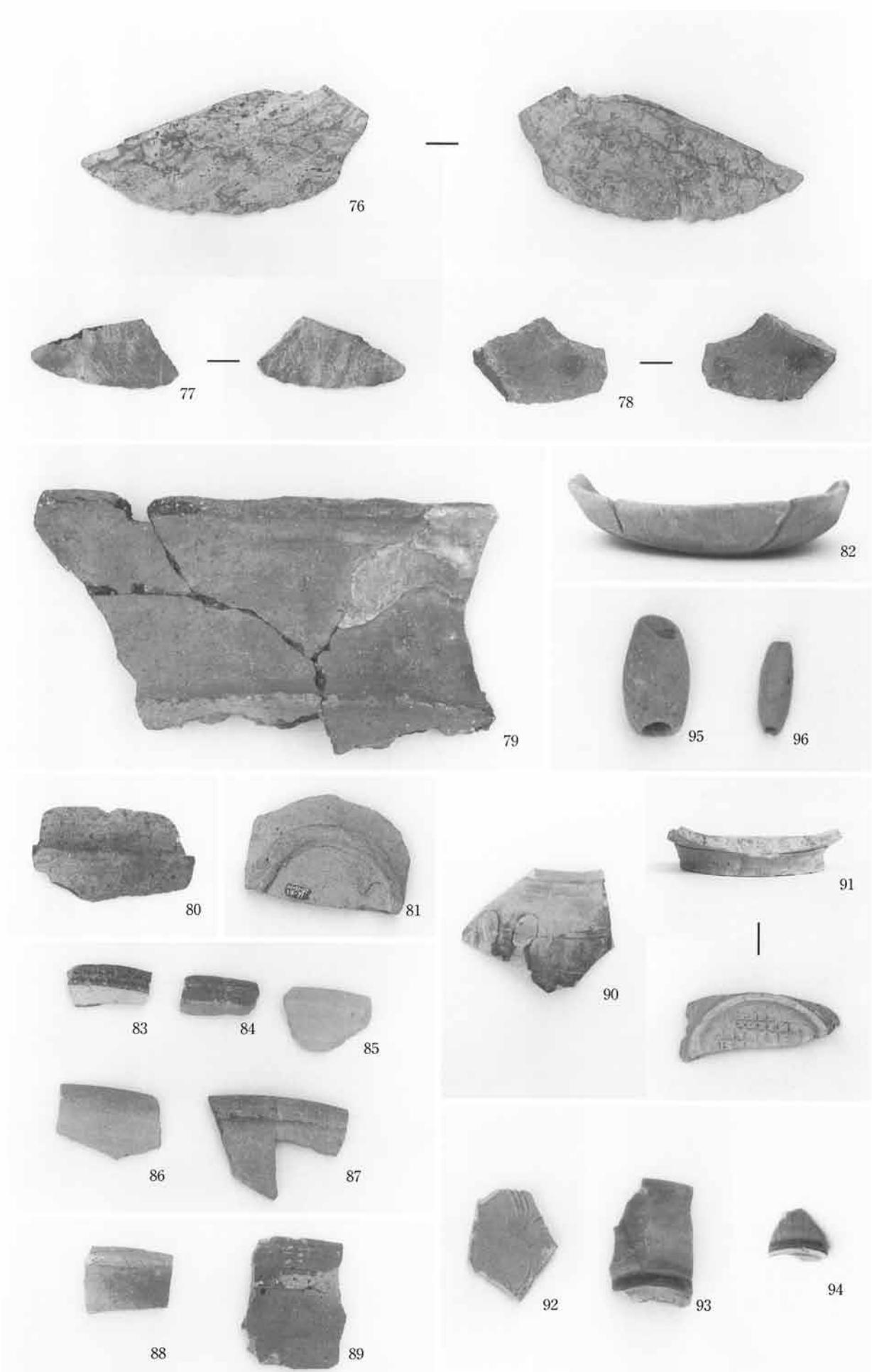
35



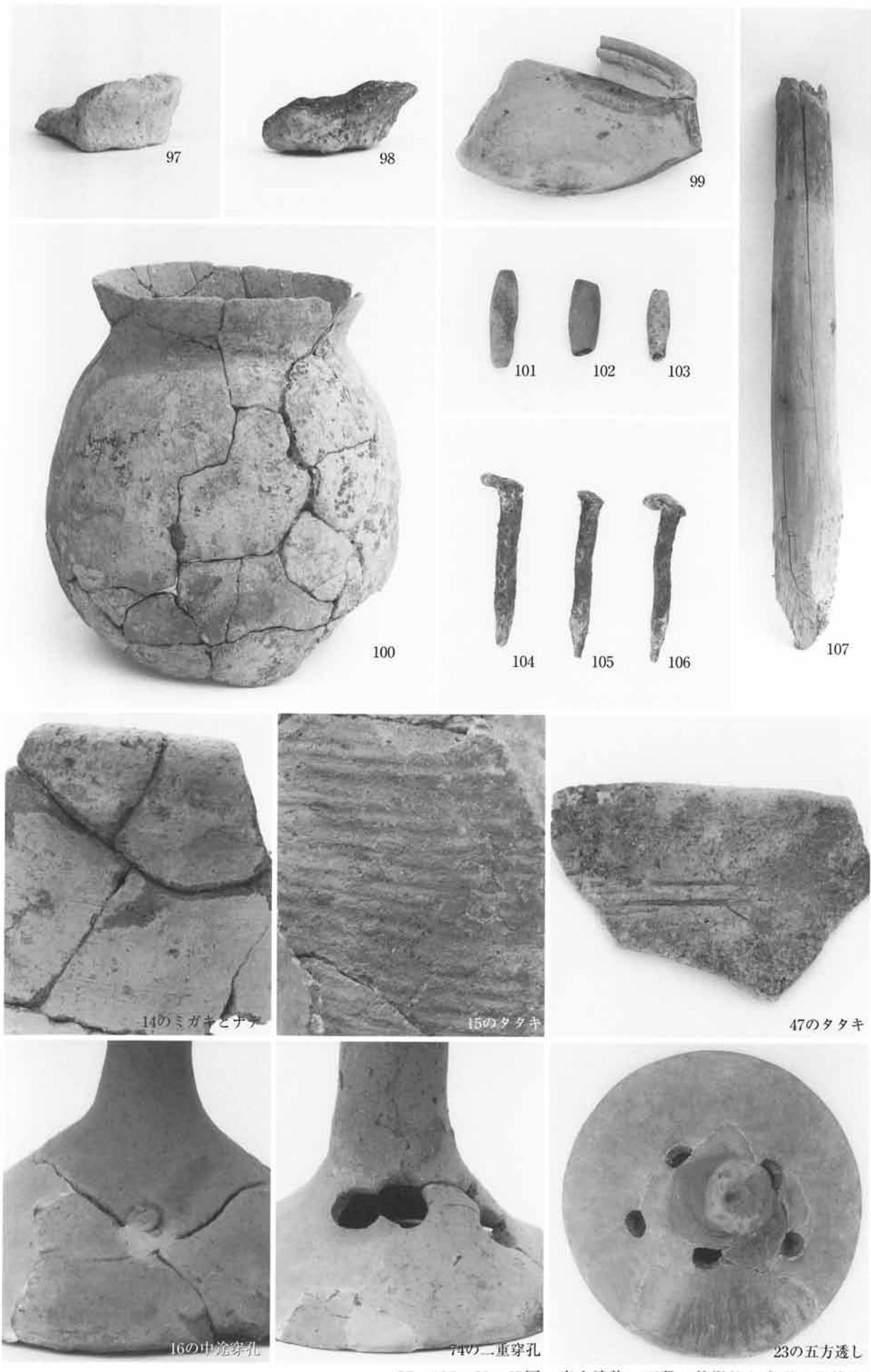
36~50 I区 溝1出土土器④



51~70 I区 溝1出土木製品、71~75 I区 溝5出土土器



76~96 II ~ IV 区 出土遺物



## 報告書抄録

ふりがな	とくぞうちくいせき							
書名	徳藏地区遺跡							
副書名	国道424号線道路改築事業に伴う発掘調査報告書							
編著者名	丹野拓・黒石哲夫・渋谷高秀							
編集機関	財団法人和歌山県文化財センター							
所在地	〒640-8268 和歌山県和歌山市湊571-1			TEL 073-433-3843				
発行年月日	西暦 2003年8月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 。 „	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
とくぞうちく 徳藏地区 いせき 遺跡	わかやまけんひだかぐん 和歌山県日高郡 みなべかわむらとくぞう 南部川村徳藏	30389	54	33度 46分 30秒	135度 19分 40秒	第1次調査 19981026～ 19990107 第2次調査 20011119～ 20020607 第3次調査 20021119～ 20021206	1,612 4,341 544	国道424号 線道路改築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
徳藏地区 遺跡	散布地 田畠	縄紋 弥生 古墳 平安 中世 近世	土坑・ピット 溝・ピット・土坑 掘立柱建物跡 土坑・ピット・溝 溝 水田畦畔・足跡 溝・ピット・足跡 鋸造関連遺構	縄紋土器・スクレイパー 弥生土器 土師器・木製品 須恵器 黒色土器 瓦器・山茶碗・土師器 陶磁器・土錘・鉄釘・杭	突帯紋土器 庄内併行期の土器群 鳥形木製品			

**徳藏地区遺跡**

—国道424号線道路改築事業に伴う発掘調査報告書—

2003年8月

編集発行 財団法人和歌山県文化財センター

印刷・製本 西岡総合印刷株式会社